土佐国分寺跡

――第一次発掘調査概報――

1988年 3 月

南国市教育委員会

土　佐　国　分　寺　跡

――第一次発掘調査概報――

1988年 3 月

南国市教育委員会

序

南国市国府地区は，黒潮あらう太平洋に面した高知県の中央部に位置する温暖な気候と肥沃な土地に恵まれた香長平野の北部に位置します。

土佐国分寺は，「寺は国華として好所をえらべ」という聖武天皇の勅命により，この地に開山しました。南には国分川の清流が西方に流れ，視野は広く開け，すぐ東方には，国衙跡をひかえ，爾来1,200有余年，参拝者の絶えることなく，文化的香りも豊かな霊地となっています。

土佐国分寺跡の寺域は，現国分寺の北・東縁に存在する土塁が，その根拠として，大正11年に現寺域が史跡に指定されています。発掘調査は，これまで昭和52年の鐘楼建立・書院改築に伴なう調査，昭和54年の庫裡改築に伴なう調査，及び市道拡幅に伴なう調査，また昭和60年の仁王門修復に伴なう調査等，数次に亘って実施しましたが，具体的な遺構の確認には至っていません。

そこでこの度，伽藍配置等を確認するため，国・県の補助を得，発掘調査を実施することとしました。本報告書は昭和62年度に調査したものをまとめたものです。これまでで，始めて建物址を検出するなどの成果があり，今後の調査に期待が寄せられます。

最後に，今回の調査にあたりご指導をいただいた高松短期大学教授・岡本健児先生，終始ご協力を願った高知県教育委員会文化振興課，また調査に理解とご協力をいただいた国分寺・林廣裕住職，ならびに地権者の皆様，国府地区の皆様方に心から感謝を申し上げる次第であります。

昭和63年３月31日

南国市教育委員会
教育長　鈴　江　廣　幸

例　　言

1．本書は，昭和62年度国庫補助事業として南国市教育委員会が実施した史跡土佐国分寺跡の発掘調査の概報である。

2．調査は，南国市教育委員会が主体となり高知県教育委員会の指導を得て実施した。発掘調査は，高知県教育委員会文化振興課埋蔵文化財班主幹山本哲也が担当し，調査事務は南国市教育委員会社会教育課社会教育係主事浜田清貴が担当した。なお，岡本健児高松短期大学教授からは，調査全般にわたって懇切な御教示，御助言をいただいた。厚くお礼申しあげたい。

3．本書で使用した図面のうち，第１図は，国土地理院発行20万分の１（高知）を，また，第２図は同院発行２万５千分の１（とさやまだＮ１－53－28－７－１・高知７号－１）を，第３図は２千５百分の１高知広域都市圏図№.９及び16を複製使用したものである。なお，第３図及び図１は，大正10年８月に作成された国分寺境内平面図（縮尺300分の１）を複製して使用したものである。方位は第１～３図が方眼北（Ｇ・Ｎ），第４図及び第５図が磁北（Ｍ・Ｎ）によるものである。

4．出土遺物の実測図は，$\frac{1}{3}$縮尺に統一した。また遺構平面図及び土層断面図は縮尺$\frac{1}{20}$による実測図を$\frac{1}{2}$又は$\frac{1}{4}$に縮尺して使用した。

5．本書の編集及び執筆は，山本哲也が担当した。

6．調査にあたっては，林廣裕住職をはじめ，地権者の今村清，浜田幸恵氏並びに地元国分地区の皆様方からは多大な御協力を頂いた。また，宗教法人土佐国分寺関係者各位には，種々御協力，御援助をいただいた。ここに改めて厚くお礼申しあげたい。

本　文　目　次

Ⅰ　土佐国分寺跡の概要 ---------- 1

Ⅱ　調査に至る経緯と経過 ---------- 4

Ⅲ　調査の概要 ---------- 7

Ⅳ　主要遺構及び遺物 ---------- 10
　遺構 ---------- 10
　ＳＢ－１について ---------- 10
　遺物 ---------- 11

Ⅴ　まとめ ---------- 14

挿　図　目　次

第１図　土佐国分寺跡の位置
第２図　土佐国分寺跡と調査地区の位置
第３図　調査地区及び検出遺構位置図
第４図　第４調査区（鐘楼北側地区）土層断面図
第５図　ＳＢ－１方形掘方断面図
写真１　ＳＢ－１検出状態（南より）
写真２　ＳＢ－１掘方根石検出状態（南東から）

図　面　目　次

図１　土佐国分寺跡概要図
図２　第１調査区（金堂北側地区）
　　遺構平面図（ＳＤ－１）
図３　第２調査区遺構平面図
図４　第３調査区遺構平面図(ＳＤ－２～４）
図５　第４調査区遺構平面図（ＳＢ－１）
図６　出土遺物実測図（瓦）
図７　出土遺物実測図（瓦）
図８　〃
図９　〃
図10　〃
図11　〃　（須恵器，土師器，土師質土器，弥生土器）

図　版　目　次

ＰＬ１　第１調査区（金堂北側地区）近景（発掘前・南東から）
　　同　　上（調査風景・東から）
ＰＬ２　ＳＤ－１検出状態（東から），ＳＤ－１完掘状態（東から）
ＰＬ３　第２調査区（寺域東側地区）井戸・溝跡（北西から），第２調査区（北から）
ＰＬ４　第３調査区（金堂北側地区）遠景（北西から），第３調査区（北西から）
ＰＬ５　第３調査区（金堂北側地区）遺構検出状態（南東から），第３調査区（北東から）
ＰＬ６　第３調査区（金堂北側地区）ＳＤ２～４（南から）
ＰＬ７　鐘楼西側　遺構検出状態（北東から）
　　第４調査区（鐘楼北側地区）発掘前（西から）
ＰＬ８　ＳＢ－１検出状態（北から）　ＳＢ－１検出状態（北東から）
ＰＬ９　ＳＢ－１完掘状態（南西から）　ＳＢ－１完掘状態（南東から）
ＰＬ10　ＳＢ－１覆土遺物出土状態（西から）
　　ＳＢ－１北側ピット遺物出土状態（東から）
ＰＬ11　ＳＢ－１　掘方
ＰＬ12　軒丸瓦
ＰＬ13　丸瓦・平瓦
ＰＬ14　平瓦
ＰＬ15　平瓦
ＰＬ16　須恵器
ＰＬ17　土師器
ＰＬ18　土師器，土師質土器，弥生土器

Ⅰ　土佐国分寺跡の概要

土佐国分寺跡は，高知平野の中央北部に位置する南国市国分546番地外に所在しており（第1，2図），標高13m前後を測る微高地上に立地している。現状は一部が畑地及び山林であるほかは，宗教法人土佐国分寺（真言宗智山派，四国第二十九番霊場）の境内地となっている。

土佐国分寺跡の周辺には土塁（幅3～4m，高さ1.5～2m）が存在し，創建当時の土塁と推測されたことにより，寺域が明確である等の理由から大正11年10月12日に国の史跡に指定されている。また，現金堂は長宗我部国親・元親父子が再建したもので，明治37年8月29日に内務省より特別保護建造物として指定を受け，その後，昭和25年8月29日に国の重要文化財（建造物）に指定されている。なお，本尊は千手観音菩薩像であり，寺蔵の木造薬師如来立像二本は，明治44年4月17日及び大正3年8月20日に国の指定をうけ，また梵鐘は（平安時代前期作，総高80.3cmで四葉複弁蓮花文の撞座をもつ），昭和31年6月28日に国の重要文化財として指定を受けている。

土塁以外の遺構については現況では明確ではなく，書院南側の内庭園に庭石として利用されている塔心礎（硅岩製，幅1.1m長さ1.5m以上，中央に心礎柱座とみられる径68cm深さ5.5cmの穴が，またその中には心柱の枘穴と考えられる径20cm深さ5cmの穴をもち，一本の排水溝を有する）から，伽藍の存在が僅かにうかがえるのみである。

創建当時の伽藍配置及び規模については，土塁の位置及び瓦の散布状況，これまでの発掘調査の状況等から，東西500尺，南北450尺の規模で東大寺式の伽藍配置であったと考えられている。（註1）特に，寺域を南北に四等分，東西に八等分して交点を求めた場合，中央の交点部分に現金堂が所在することから，（註2）創建当時の金堂も現金堂の位置とほぼ同一であったことが指摘されている。（註3）また，東大寺式伽藍配置として把えれば，総ての伽藍が中央の東西四区画内に収まる特色があることが指摘されている。（註4）

土佐国分寺跡の変遷に関しては，発掘調査による検出遺構及び出土遺物から，また平安時代前期に製作時期が求められる梵鐘の内容等から，奈良時代中頃から造寺が行われて（註5）平安時代前期には完成し，平安時代後期には火災によって創建当時の伽藍が焼失したことが推察されている。しかし，具体的な伽藍の内容及び性格，時期的な変遷過程等については現在に至るまで不明確なままであり，（註6）計画的な発掘調査による検証により実態が解明されることが課題となっている。

註1　(1)岡本健児『高知県の考古学』，(2)第三項土佐国分寺の考古学的考察「第4章古代の文化第2節寺院」『南国市史上巻』昭和54年　南国市

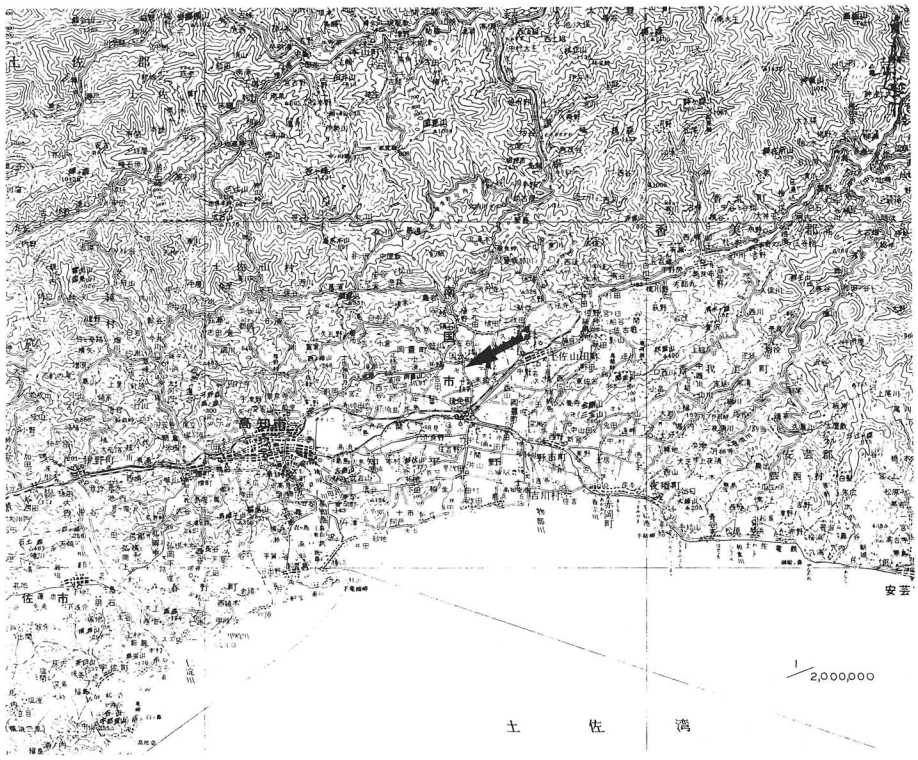
註2　岡本健児他『土佐国分寺　鐘楼建立・書院改築に伴う発掘調査』昭和53年　土佐国分寺
岡本健児他『土佐国分寺　庫裡改築に伴う発掘調査』昭和54年10月　土佐国分寺

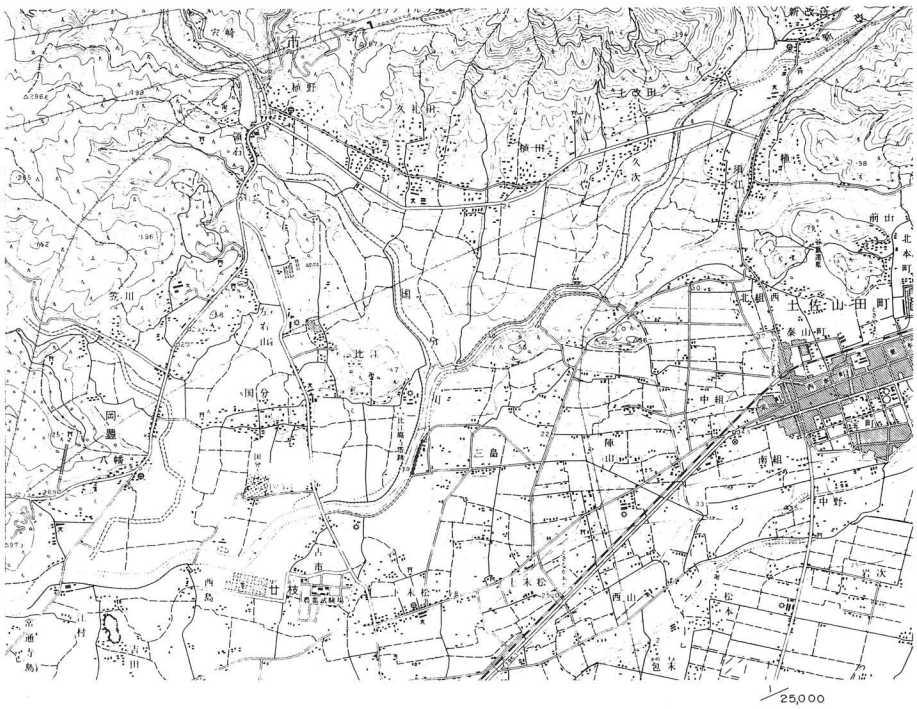
註3　註1(1), (2)

註4　註1(2)

註5　書院改築に伴う発掘調査時に（註2参照），二次的に火を受けた瓦類が瓦溜から検出された。また，奈良～平安時代に属する須恵器及び土師器等に加え，串状の杉木にさされた富寿神宝十枚が出土した。

註6　註1(2)





第１図　土佐国分寺跡の位置

II　調査に至る経緯と経過

史跡土佐国分寺跡は，大正11年10月12日に国の史跡として指定され，土佐国分寺寺域及びその周辺の畑地，山林，宅地を指定区域として遺跡の保存措置が図られてきた。しかし，土佐国分寺跡に関連する遺構として寺域を画する土塁等が一部遺存してはいるものの，かつての主要伽藍についてはその内容が全く確認されておらず，ただ東大寺式の伽藍配置であったことが推察されているに過ぎない。

土佐国分寺跡の発掘調査としては，これまで鐘楼建立及び書院改築，庫裡改築，市道拡幅工事，仁王門解体修理工事等に伴って調査が実施されているが，何れも史跡の現状変更等に伴う部分的な調査であり，土佐国分寺跡の伽藍配置に関連する具体的な遺構の検出には至っていない。また，土佐国分寺跡の伽藍配置を明確にすることを目的とした学術的な調査もこれまで実施されていない。（註1）（註2）（註3）（註4）

土佐国分寺跡には，現在四国第二十九番霊場である土佐国分寺が所在し，天平期以来の法燈が守られており，名刹土佐国分寺を訪れる参詣者の数は極めて多い。しかし，史跡土佐国分寺跡の指定区域の中核を占める範囲は現国分寺の寺域内となっており，その維持管理上，今後とも諸施設の増改築工事等が必要となり，また，史跡としての保存及び活用面に配慮を要することからも，土佐国分寺跡の内容に関する具体的な資料を得，そのうえ，今後の史跡としての保存方策の検討を図ることが必要となってきている。このため，南国市教育委員会では，文化庁，高知県教育委員会，宗教法人土佐国分寺と協議を重ね，その結果として国の補助を得て昭和62年度から土佐国分寺跡の発掘調査を行うこととなった。

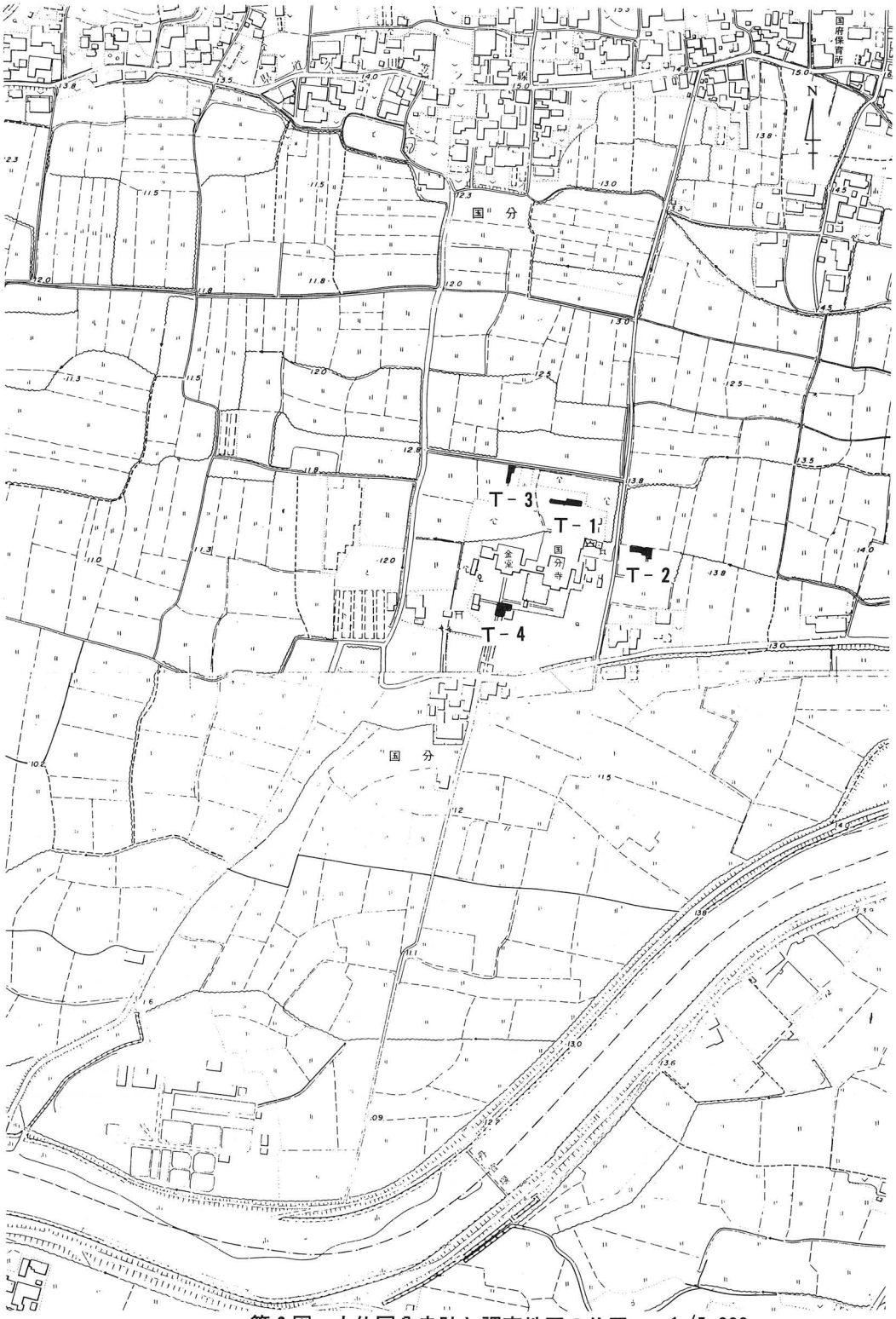
調査は，現国分寺の書院北側の畑地，寺域東側の水田地及び金堂北側の畑地を対象地として調査区を設定し，発掘を行った。また，参道改修工事に係る史跡の現状変更等に伴う発掘調査において，鐘楼西側部分から礎石建物址の一部と考えられる遺構が検出されたため，調査区を東側に拡幅して調査を実施した。（註5）各調査区の地番及び調査期間，発掘面積は以下のとおりである。

第1調査区（書院北側地区）　南国市国分527番地
昭和62年9月21日から10月9日まで。発掘面積58m²。

第2調査区（寺域東側地区）　南国市国分560－1番地
昭和62年9月7日から9月14日まで。発掘面積87m²。

第3調査区（金堂北側地区）　南国市国分528－1番地
昭和62年12月17日から12月21日まで。発掘面積41m²。

第4調査区（鐘楼北側地区）　南国市国分543番地
昭和62年12月21日から12月27日まで。発掘面積32m²。



第2図　土佐国分寺跡と調査地区の位置　1/5,000

註１　岡本健児他『土佐国分寺　鐘楼建立，書院改築に伴う発掘調査』昭和53年　土佐国分寺

註２　岡本健児他『土佐国分寺　庫裡改築に伴う発掘調査』昭和54年10月　土佐国分寺

註３　昭和54年10月に，土佐国分寺西側の南北方向の市道部分について，市道拡幅工事に係る史跡の現状変更等に伴う発掘調査が南国市教育委員会によって実施された。調査地点は，土佐国分寺跡の西側寺域と考えられる位置であり，調査の結果，土塁基底部とみられる帯状の集石遺構が検出されている。

註４　昭和60年10月に，仁王門解体修理工事に伴って南国市教育委員会が調査を実施したが，土佐国分寺跡に関連する遺構は検出されなかった。

註５　昭和62年11月18日から12月３日の間に南国市教育委員会が調査を実施した。現国分寺金堂前から仁王門前に至る参道部分について，幅2.6ｍ長さ43ｍの範囲で発掘を行った結果，鐘楼西側部分で方形の掘方をもつ建物址の一部を確認した。また，金堂南側において古墳時代の方形竪穴住居跡１棟が検出されたほか，弥生時代及び平安～室町時代に属する柱穴，ピット，近･現代の柱穴，ピット，採土穴等を検出した。なお，現金堂南側前の発掘区からは土佐国分寺跡の旧金堂等に関係した遺構は検出されなかった。

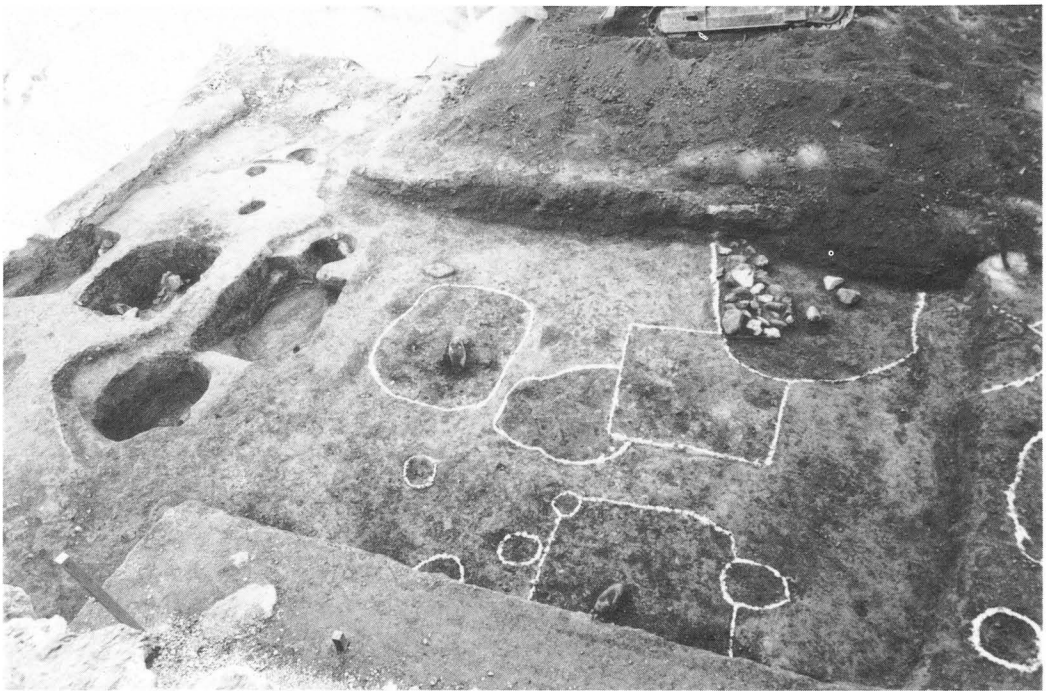


写真１　ＳＢ－１検出状態（南より）

III　調査の概要

今回の調査では，寺域東限・北限及び僧房等を確認するために，現国分寺金堂北側，書院北側部分，国分寺東側部分について発掘を実施したほか，鐘楼西側部分で参道改修工事に伴う発掘調査によって検出された建物址の規模を確認するために，鐘楼北側部分の調査を併せて実施した。

各発掘区については便宜上，第１～４調査区の名称を与えて区分した。(註１)以下，各調査区の概要について述べることとする。

第１調査区（書院北側地区）

現国分寺書院の北側に幅1.4～２ｍ，長さ24ｍの東西方向のトレンチを設定した。発掘区周辺は，標高13.10ｍ前後を測る平坦地で，現状は畑地となっている。

層序は４層に区分される堆積土がみられ，第Ⅰ層は表土で茶褐色腐植土，第Ⅱ層褐色粘質土，第Ⅲ層茶褐色粘質土，第Ⅳ層茶褐色粘質土（地山）である。このうち，第Ⅲ層中からは須恵器及び土師器，瓦類が出土し，第Ⅳ層上面では遺構が検出された。土層全体の堆積厚は，トレンチ東側では平均20～30cmであったが，西側では60～90cmを測り，第Ⅳ層上面は，トレンチ中央部から西側方向にかけて傾斜している。トレンチ両端の比高差は70cmを測る。

検出遺構は，東西方向の溝跡，柱穴及びピットである。なお，トレンチ西端部では近・現代の著しい撹乱がみられた。

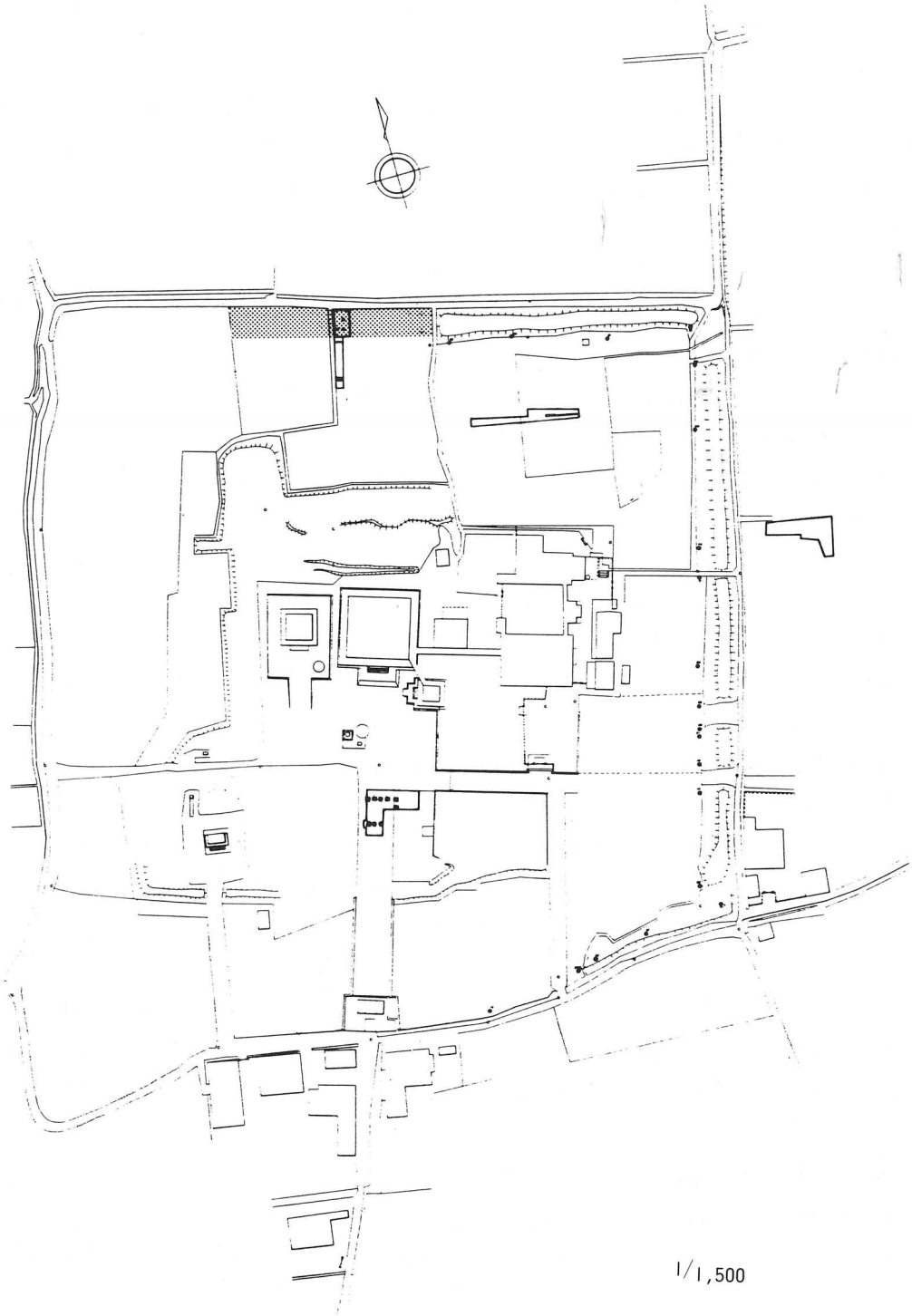
第２調査区（寺域東側地区）

第２調査区では，寺域東限を確認するため幅3.5ｍ，長さ17ｍの東西方向のトレンチを設定し，一部を拡張した。基本層序は第Ⅰ層が耕作土で茶灰色粘質土，その下層に茶褐色粘礫土をはさんで茶褐色礫土（地山土）となっており，堆積厚は平均18～20cmである。茶褐色粘礫土中からは，須恵器，土師器，土師質土器，近世陶磁器等の細片が出土した。トレンチ中央部から西側にかけて遺構は検出されなかったが，東側では東西方向の溝跡及び井戸を検出することができた。溝跡は茶褐色礫土から掘り込まれているが，北側肩部のみの検出であり規模，性格等については不明である。井戸は溝跡を壊して掘り込まれており，上部は室町時代に属する土師質土器を含む第Ⅵ層黒褐色粘質土で覆われている。井戸及び溝跡の形成時期は，室町時代に位置づけられ，調査区周辺に屋敷跡の存在が推測される。

第３調査区（金堂北側地区）

第３調査区では，幅1.4～1.6ｍ，長さ16.6ｍのトレンチを設定し一部拡張し，寺域北側の土塁の西側延長部分についての確認調査を行った。発掘区周辺は，標高12.75ｍ前後を測る平坦な畑地である。

基本層序は，第Ⅰ層耕作土で茶灰色粘質土，第Ⅱ層褐色粘質土，第Ⅲ層茶褐色粘質土（地山）で，第Ⅲ層上面で遺構が検出された。遺構検出面の標高は12.50ｍ前後を測り，第Ⅲ層上面まで



第3図　調査地区及び検出遺構位置図

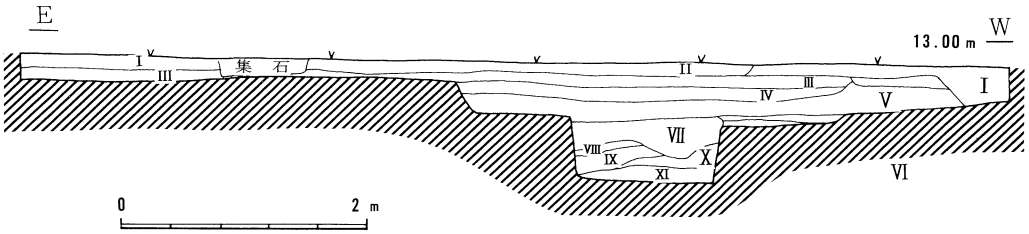
の土層堆積厚は平均30cmであった。検出された遺構は，溝跡，柱穴，ピットであるが，トレンチ北端の遺構検出状態からみれば，築地の存在がうかがわれる。なお，第II層中からは，瓦類，須恵器，土師器が出土した。

第4調査区（鐘楼北側地区）

現国分寺の鐘楼北側に，幅4m，長さ8mのトレンチを設定し一部拡張した。この発掘区は，鐘楼西側及び北西側において，参道改修工事に伴う発掘調査により検出された建物址の規模及び性格を明らかにするために発掘区を東側へ拡幅したものである。

発掘区の基本層序は，第I層褐灰色粘質土，第II層褐色粘質土，第III層暗褐色粘質土，第IV層褐色粘質土（砂礫混じり），第V層黒褐色粘質土，第VI層黄茶褐色粘質土（地山土）である。このうち，第I層～IV層は，近・現代のかく乱を強く受けており，須恵器及び土師器片と共に近世陶磁器，瓦片が出土した。なお，第V層中からは，須恵器及び土師器，瓦類が出土した。検出遺構は，弥生時代後期～古墳時代初頭の土壙及びピット，平安時代後半のピット，近世の採土穴及びピットのほか，土佐国分寺跡の伽藍の一部とみられる三間×四間以上の建物址の所在を確認することができた。

I 褐灰色粘質土　VII 暗褐色土
II 褐色粘質土　VIII 黒褐色土
III 暗褐色粘質土　IX 淡茶褐色土
IV 褐色粘質土　X 黒褐色土
V 黒褐色粘質土　XI 淡茶褐色土
VI 黄茶色粘質土



第4図　第4調査区（鐘楼北側地区）土層断面図

Ⅳ　主要遺構と遺物

遺構

第１及び第３調査区において，東西方向の溝跡及び柱穴，ピットを，また第２調査区において中世に属する溝跡及び井戸を検出することができた。第１調査区で検出された溝跡は，幅54～70cm，深さ14～20cm，検出長8.7ｍを測る東西方向の溝（ＳＤ－１）で，溝の埋土（茶褐色粘質土）中からは，瓦類，須恵器及び土師器片が出土した。また，第３調査区で検出された溝跡は幅60cm，深さ20cm，検出長1.4ｍを測る小溝(ＳＤ－２)，幅65cm，深さ15～25cm，検出長1.5ｍを測る東西方向の溝(ＳＤ－３)，幅1.5ｍ，深さ20cm，検出長1.7ｍの大溝（ＳＤ－４）で，出土遺物の内容から奈良時代中頃～後半に形成されたと考えられるものである。第３調査区北端で検出されたＳＤ－２の北側には，溝跡に並行する柱穴跡がみられ，この部分が僅かに段状を呈している（下段との比高差10cm）ことから，上部が後世の削平を受けてやや不明確なものの築地の痕跡である可能性が強い。なお，第３調査区北端は，寺域北限の土塁の西側延長部に位置することから，寺域北限部は築地によって画されていたことが推察される。

第４調査区では，三間×四間以上の東西方向の建物址（ＳＢ－１）及び柱穴，土壙，ピット等が検出された。ＳＢ－１は１辺1.1～1.2ｍを測る方形の掘方をもち，梁行5.8ｍ，桁行７ｍ以上を測るもので，三間×五間の建物址と考えられる。掘方の上部には根石として使用されたと考えられる15～20cm大の河原石を残すものがみられ，また，掘方内からは柱心の痕跡がみられず淡茶色土及び黒褐色土による版築状の地業が認められることから，掘立柱建物址ではなく礫石基底部に地業を施した礫石建物址であると判断される。掘方埋土中から，瓦類・須恵器及び土師器片が出土しており，出土遺物の時期から土佐国分寺跡創建当時の主要遺構であると考えられる。

ＳＢ－１について

第４調査区で検出されたＳＢ－１は，これまで確認されている土佐国分寺跡関連遺構のなかで，創建当時の伽藍配置に関係した最も明確な遺構であり，従来不明瞭であった土佐国分寺跡の主要遺構の一部である。ＳＢ－１の内容及び性格についてふれることにしたい。

位置

ＳＢ－１は，現国分寺金堂南側基壇から計測して南側約24ｍの位置で検出された。鐘楼西側参道下から鐘楼北側部分にかけて，地表下20～40cmから検出されたもので，ＳＢ－１の東南部は鐘楼下にかかっている。検出位置は，推定寺域（東西500尺南北450尺）の中軸線上で，寺域南限から約23.80ｍを測り，(註１) 建物東縁から寺域東限までは約71.30ｍ（240尺）を測る。(註２)

検出状況

遺構は，第Ⅵ層黄茶褐色粘質土（地山土）上面において検出された。遺構検出面の標高は，12.40ｍ前後である。遺構上部の堆積土は第Ⅴ層黒褐色粘質土で，同層中からは瓦類（図６～

10), 須恵器及び土師器（図11）が出土している。なお，ＳＢ－１に伴う基壇，溝，廂，回廊等の遺構は確認されなかった。

掘方は，一辺1.1～1.2ｍ×1.4ｍの長方形状で，深さは平均40～50cmである。掘方内からは，柱心は検出されず，淡茶色土及び黒褐色土による版築状（硬質ではなく，軟質である。）の堆積土がみられる。また，掘方の一部では，掘方上部に根石としての使用が考えられる15～20cm大の河原石が残存するものが認められ，礎石は遺存しなかったものの礎石下部に方形の掘り込み基盤を有していたものと判断される。このため，ＳＢ－１は礎石建物であると考えられ，礎石位置に地業として掘り込み基盤を施していたと推定される。なお，掘方中心間の距離は，ＳＢ－１の北縁及び南縁部で1.5ｍ前後であり，北東隅及び東縁部では1.8ｍ前後を測る。

遺構の検出状態から，ＳＢ－１は桁行７ｍ以上梁間5.8ｍを測る礎石建物で，東西五間南北三間規模の東西棟の建物であると考えられる。なお，建物の主軸はＮ－16°－Ｅである。

性格

ＳＢ－１は，推定寺域の南側中央部にあたり中軸線上に位置している。土佐国分寺跡の伽藍配置については，寺域を画する土塁及び現金堂の配置等からこれまで東大寺式伽藍配置であると推察されている。ＳＢ－１の位置としては，東大寺式伽藍配置とすれば中門部分に該当するが，回廊等の付属施設（註３）は検出されておらず，またＳＢ－１掘方の間隔は1.5ｍ及び1.8ｍと短いことから，現状ではＳＢ－１を中門と判断することは難しい。ＳＢ－１周辺の調査によって遺構の性格を明らかにする必要がある。

註１　昭和52年２月に行われた鐘楼部分の発掘調査では，調査範囲が極めて限定的であった関係で，建物址の所在は確認されなかった。調査時に検出された幅1.35ｍ×0.9ｍ，深さ0.6ｍの貯蔵穴状の遺構が，ＳＢ－１の掘方の一部であると判断される。

註２　造営尺を唐尺＝令小尺として，１尺の近似値から復元すれば80尺が得られる。

註３　岡本健児『高知県の考古学』昭和43年　吉川弘文館

遺物

今回の調査では，第１・３・４調査区のトレンチから瓦類が，また各トレンチから須恵器及び土師器が出土したほか，第２調査区で土師質土器が，第４調査区で弥生土器が出土した。出土遺物の総数は，破片数で約300点である。以下，主要遺物の概要についてふれることにしたい。

瓦（図６～10）

瓦類の出土点数は少なかったが，単弁蓮華文軒丸瓦（１），複弁蓮華文軒丸瓦（２），丸瓦（３～５・８），平瓦（６・７・９～20）が出土した。土佐国分寺跡からはこれまで，六種にわけられる軒丸瓦（単弁蓮華文四種・複弁蓮華文二種）をはじめ，重弧文軒平瓦，平瓦及び丸瓦が出土している。また，瓦窯跡としては土佐山田町新改東谷の東谷瓦窯跡及び土佐山田町楠目の長谷山瓦窯跡（註１）が知られている。今回出土した軒丸瓦は，先に確認されている六種（註２）のうちの二種で，奈良時代後半段階（註３）に位置付けられると考えられるものである。また，平瓦については，凸面に

格子目文（６・７・９～12），縄目（13・14）による叩き目が残るもののほか，叩き目をすり消して無文化したもの（15・16），ハケ目による調整が施されたもの（17～20）がみられた。平瓦のうち20は，他の瓦と異なり，明らかに須恵器窯跡で焼成されたもので，ＳＢ－１の柱穴掘方底面から出土した。また，19は隅切瓦である。３・４・11～13の瓦は第１調査区中央部遺構検出面上で，７・19は第３調査区で検出されたＳＤ－２埋土中から，その他については第４調査区で検出のＳＢ－１周辺の遺構検出面上部の堆積土中から出土した。

須恵器（図11－12～18）

甕口縁部（12），杯身（13・14），杯蓋（15・17），碗（16），瓶（18）が出土した。12・13・15は第１調査区中央部で，18・26は第３調査区北部で，また14・16・17は第４調査区で出土したもので，14・17（ＳＢ－１掘方埋土中）を除いて他は遺構検出面上部の堆積土中から出土した。

遺物の所属時期は，12～14が古墳時代後期（６Ｃ末～７Ｃ前半）に，13・15～18が奈良時代中葉～後半に求められる。

土師器（図11－１～11・19・26・27）

杯（１～10・27），椀（11・26），甕（19）がみられた。２～４・６～11・27はＳＢ－１北側のピット中から一括したものであり，１・５はＳＢ－１検出面上の堆積土中から出土した。また26は，第１調査区中央部で出土したものである。２～４・６～11・26・27は，平安時代中葉～後半に位置づけられる。

土師質土器（図11－22～25）

第２調査区で検出された井戸の上部堆積土中から出土したものである。ロクロ成形によるもので，糸切底である。

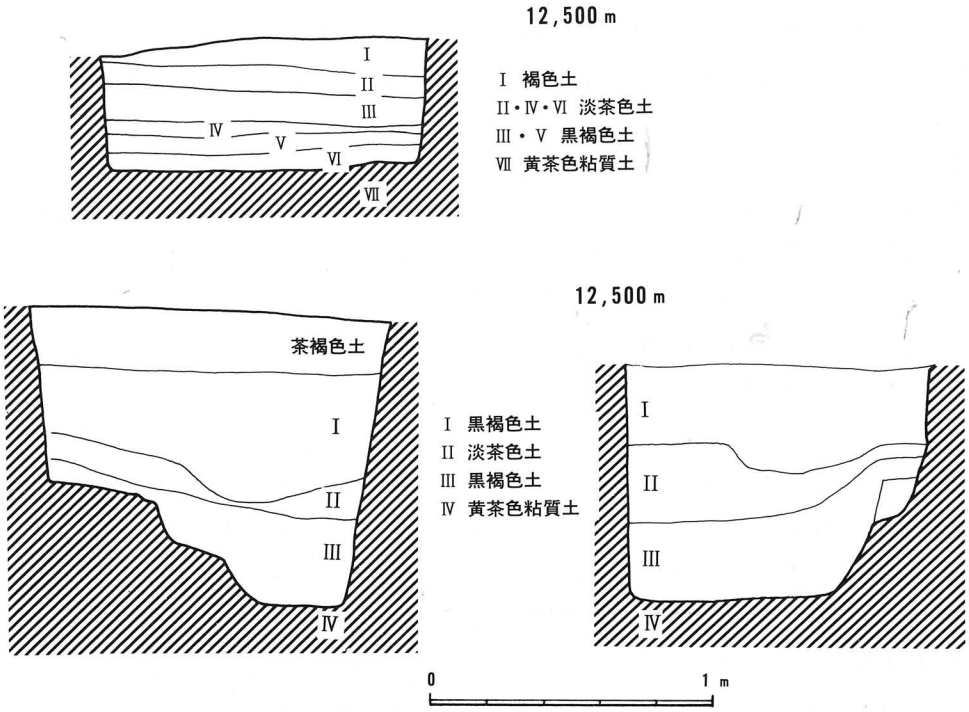
弥生土器（図11－20・21）

第４調査区で出土したもので，20・21は土壙中から出土した。弥生時代後期後半に属するものと考えられる。

註１　岡本健児　第４章第２節第三項「土佐国分寺の考古学的考察」『南国市史・上巻』　昭和54年10月

註２　廣田典夫　『新改東谷古窯群の発掘』　昭和53年　土佐山田町教育委員会

註３　註１に同じ



第5図　ＳＢ－１方形掘方断面図

写真2　ＳＢ－１掘方根石検出状態（南東から）

Ⅴ まとめ

土佐国分寺跡の発掘調査は，史跡の現状変更等に伴う発掘調査を含めてこれまで6次にわたる調査が実施されているが，伽藍配置に関連した具体的な遺構は検出されていなかった。

今回の調査は，土佐国分寺跡の範囲及び伽藍配置等を明らかにすることを目的として実施されたもので，土佐国分寺跡の学術的な調査としては最初の発掘調査である。以下，調査で得られた所見と今後の問題点について論述してまとめとしたい。

(1) 現国分寺の書院北側，金堂北側，鐘楼北側，寺域東側に調査区を設定して発掘を行った結果，礎石建物址及び柱穴，ピット，溝跡，井戸等を検出し，併せて弥生時代後期，古墳時代後期，奈良時代中葉～平安時代後半，室町時代に所属する土器，瓦等を検出した。

(2) 土佐国分寺跡に関連する遺構としては，第1調査区（書院北側地区）で東西方向の溝跡（ＳＤ－１）及び柱穴，ピットを，第3調査区（現金堂北側地区）で東西方向の溝跡三条（ＳＤ－２～４），方形の掘方をもつ柱穴，ピット等を検出したのに加え，第4調査区（現鐘楼北側地区）で東西棟の礎石建物址（ＳＢ－１），柱穴及びピットを検出することができた。なお，第2調査区（寺域東側地区）では，寺域東限を確認するために東西方向の発掘区を設けたが，関連遺構は検出されなかった。

(3) 現金堂北側地区で検出されたＳＤ－２及びその北側の柱穴は，築地の存在を想定させるものであり，検出位置が寺域北側土塁の西側延長部にあたることから，寺域北限は築地によって画されていた可能性が強い。

なお，この部分では上部の削平が著しく，遺構検出面上部の堆積土も浅かったことから，築地に伴う基壇等は検出できなかったが，今後，現存土塁の一部立ち割り調査を含めた面的調査によって，築地の痕跡及びその範囲，形成時期等について検討を進めたいと考えている。

金堂北側地区では，上記のほかにＳＤ－３・４及び一辺0.9～1.1mを測る方形掘方をもつ柱穴跡が検出されており，規模及び内容等については不明であるが，掘立柱建物が所在していたことが確認された。なお，出土遺物の内容からみて，ＳＤ－３・４及び柱穴跡は奈良時代中葉～後半にかけて形成されたと考えられる。

(4) 現鐘楼北側地区で検出されたＳＢ－１は，礎石下部に方形の掘り込み基盤をもつもので，桁行4間，梁間1間分が検出されたが，全体の規模として桁行5間，梁間3間に復元される建物である（桁行7ｍ以上梁間5.8ｍ）。建物の主軸はＮ－16°－Ｅであり，現存する土塁等による推定寺域の方位と合致している。掘方埋土中からは，瓦（図10－20）及び須恵器（図11－14・17）が出土した。

ＳＢ－１の位置は，推定寺域の中軸線上にあり，伽藍配置からすれば中間の位置にあたる。しかし，建物の構造上からは中門とはみなし難く，現状では堂舎の一部として把握されるにとどまる。ＳＢ－１の性格については，周辺部の調査によってさらに明確にされる

必要がある。

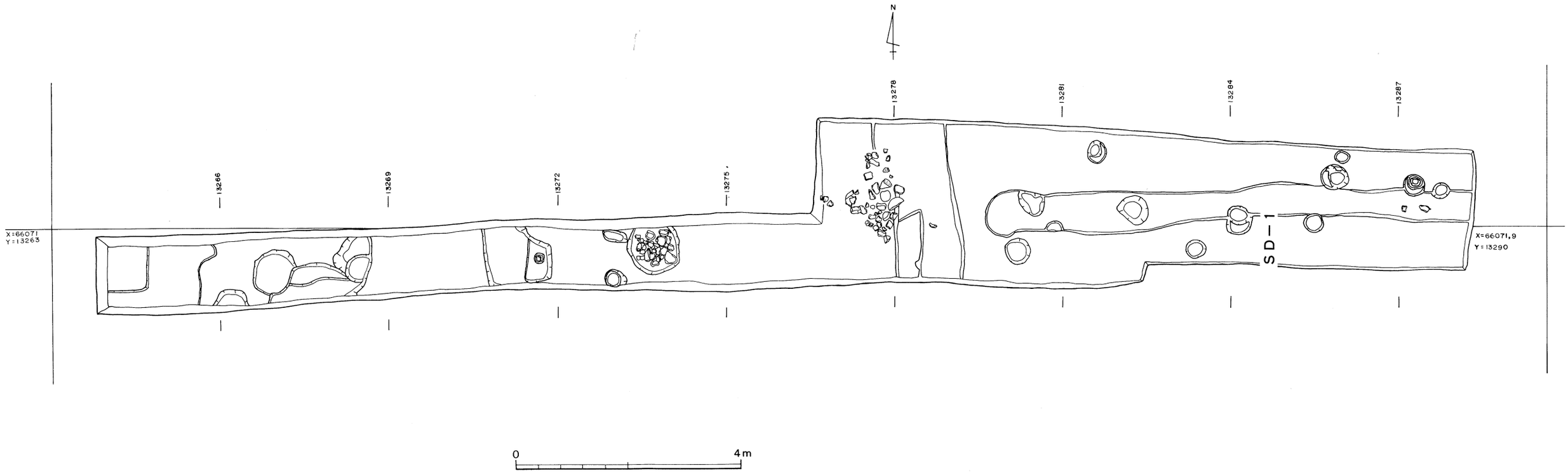
(5) 土佐国分寺跡はこれまで，東西500尺南北450尺の寺域をもち，土塁によって寺域が画された，東大寺式伽藍配置をもつ奈良時代寺院跡であると推察されてきた。しかし，土塁等の現存遺構，遺物の散布状況及び部分的な発掘調査の成果等からは資料的制約が強く，詳細な検討を行うには至っていなかった。

今回の調査では，ＳＢ－１をはじめＳＤ－２～４，柱穴及び溝，ピット等が検出され，土佐国分寺跡に関連する具体的な遺構が確認された。調査によって得られた資料の検討により，また今後の発掘調査によって土佐国分寺跡の実態がさらに解明されるものと期待するものである。

図面・図版

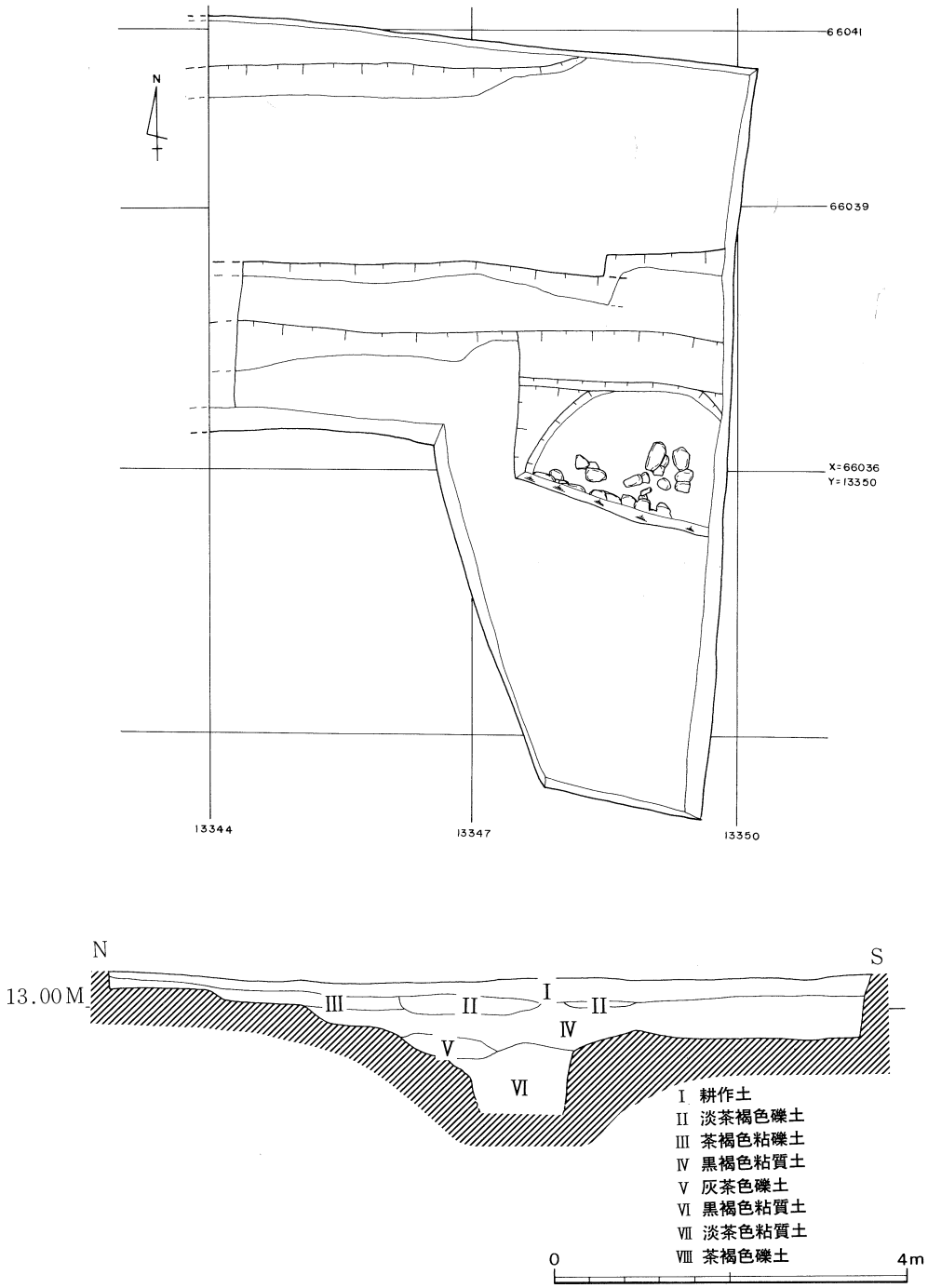
図1

土佐国分寺跡概要図



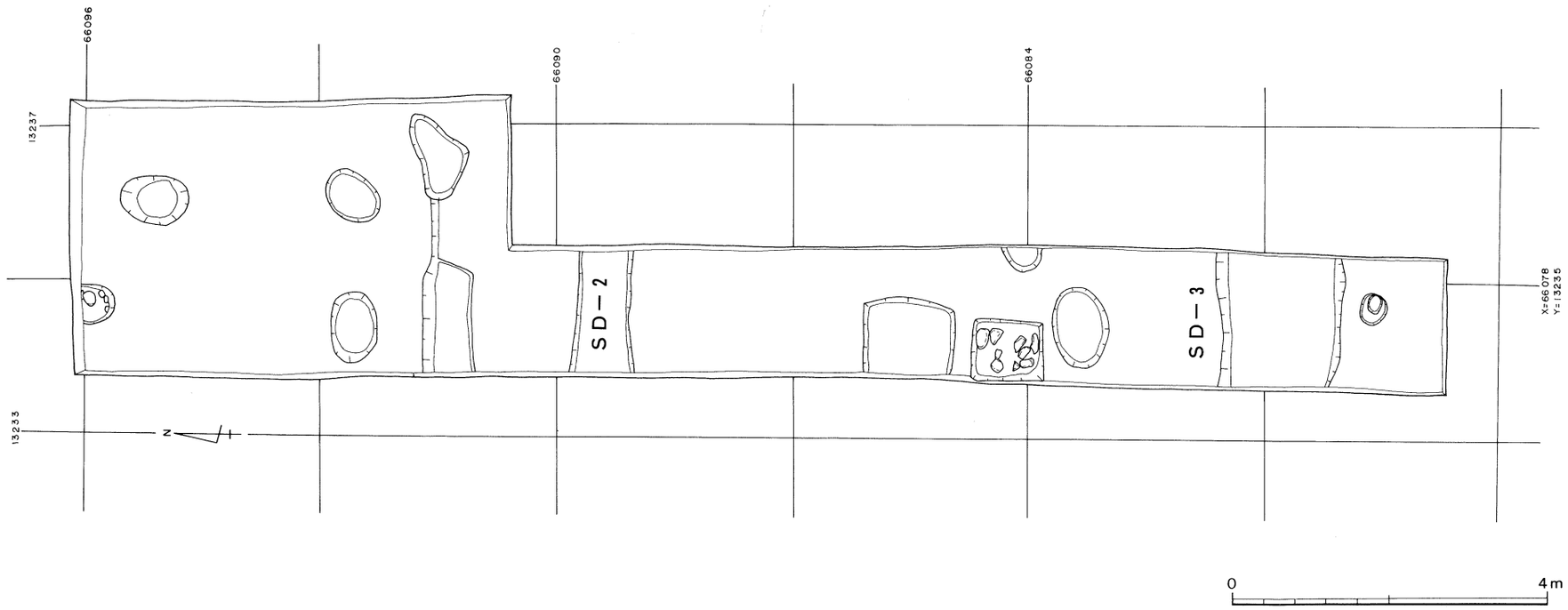
第１調査区（金堂北側地区）遺構平面図（ＳＤ－１）

図 3

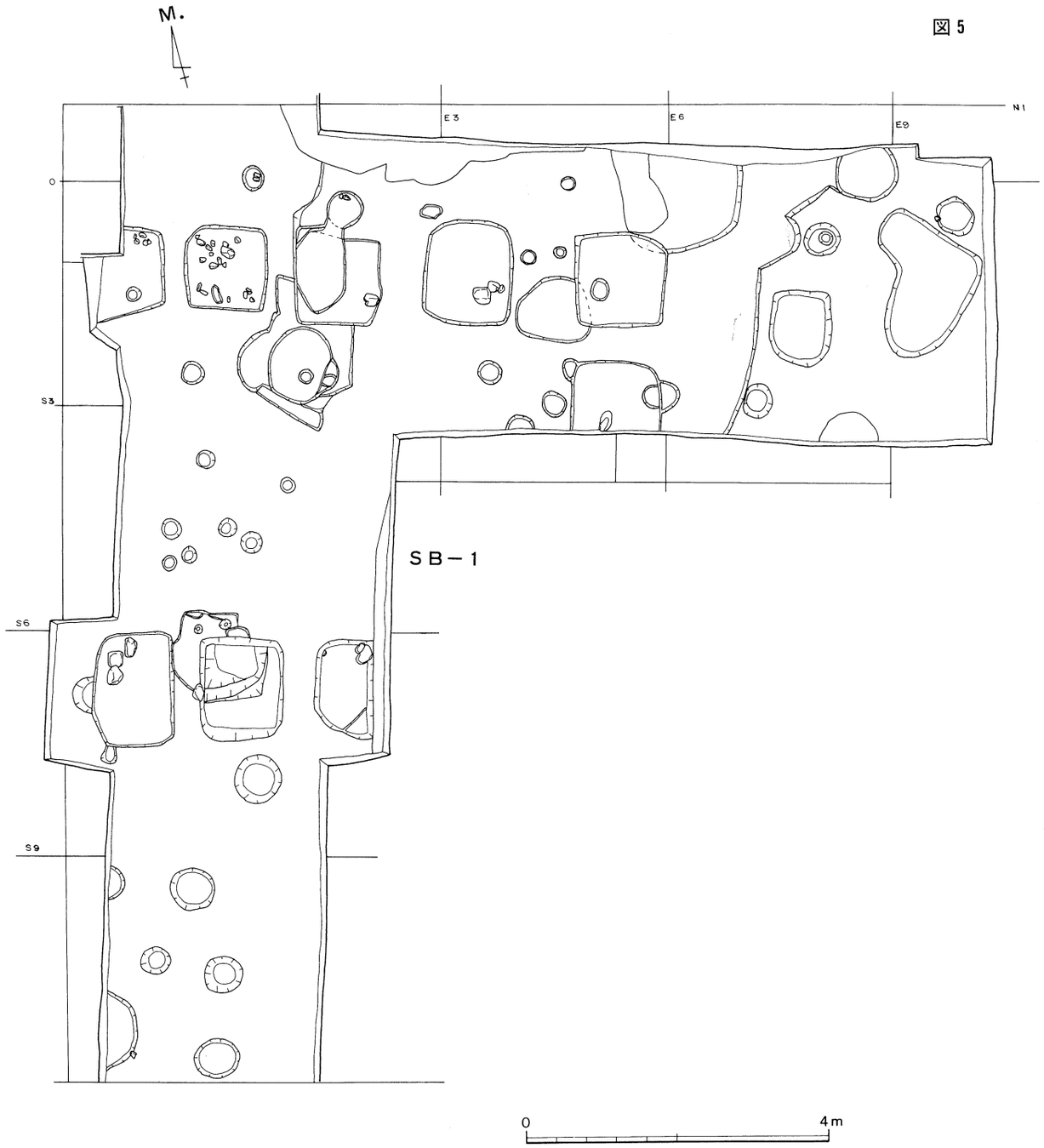


第 2 調査区(寺域東側地区)遺構平面図

図 4

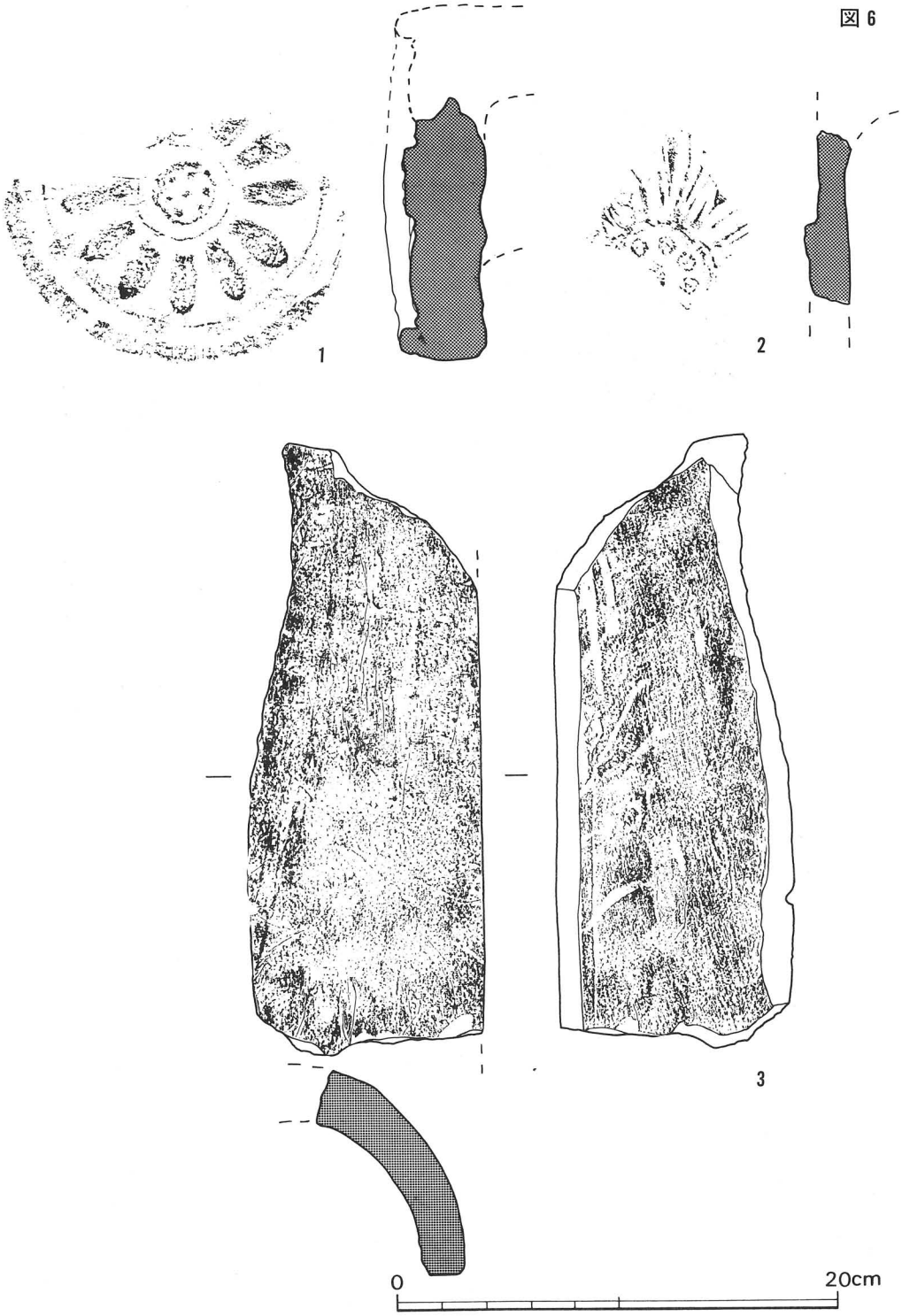


第 3 調査区（金堂北側地区）遺構平面図（ＳＤ－２～４）



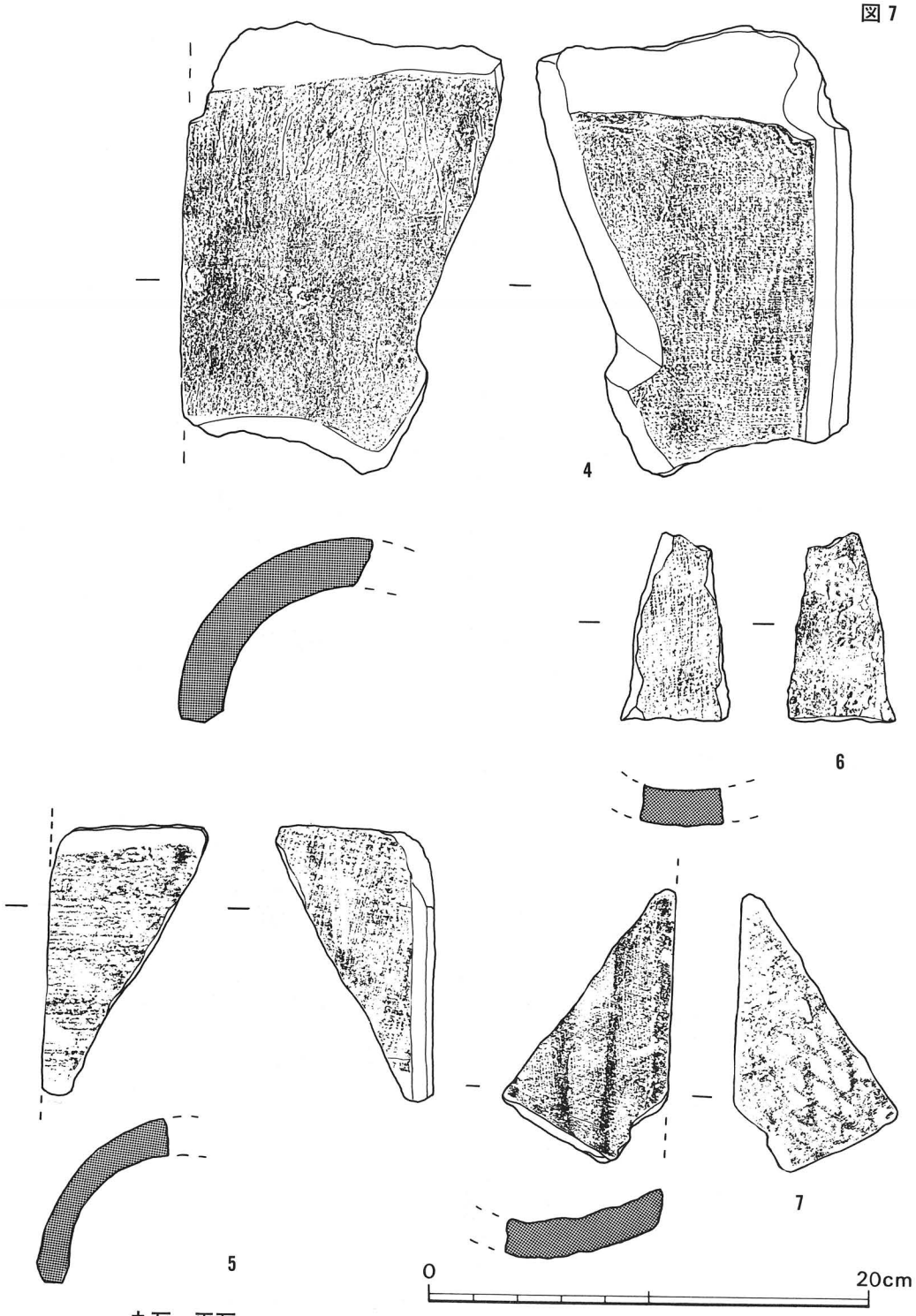
第 4 調査区（鐘楼北側地区）遺構平面図（ＳＢ－１）

図 6



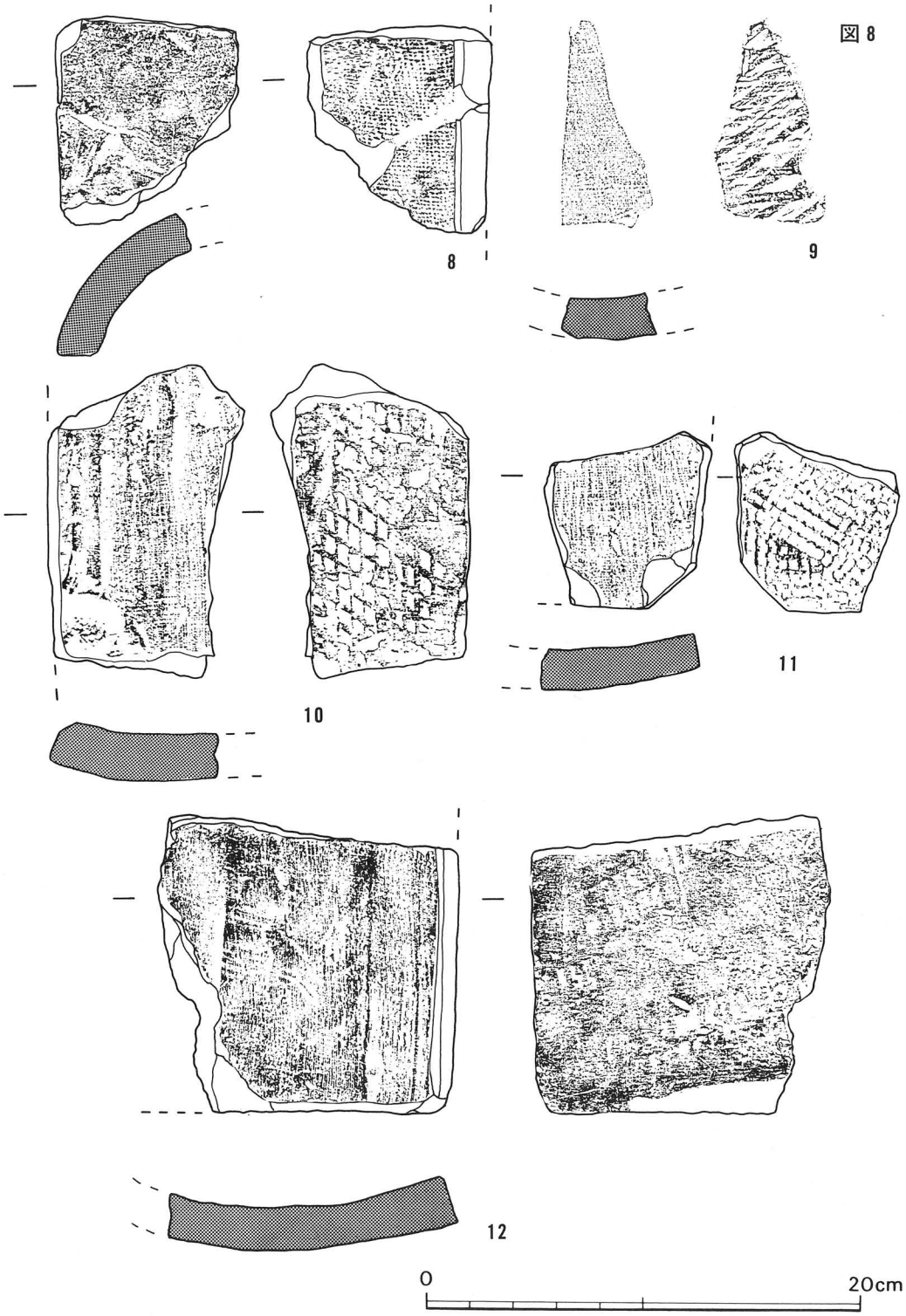
軒丸瓦・丸瓦

図 7



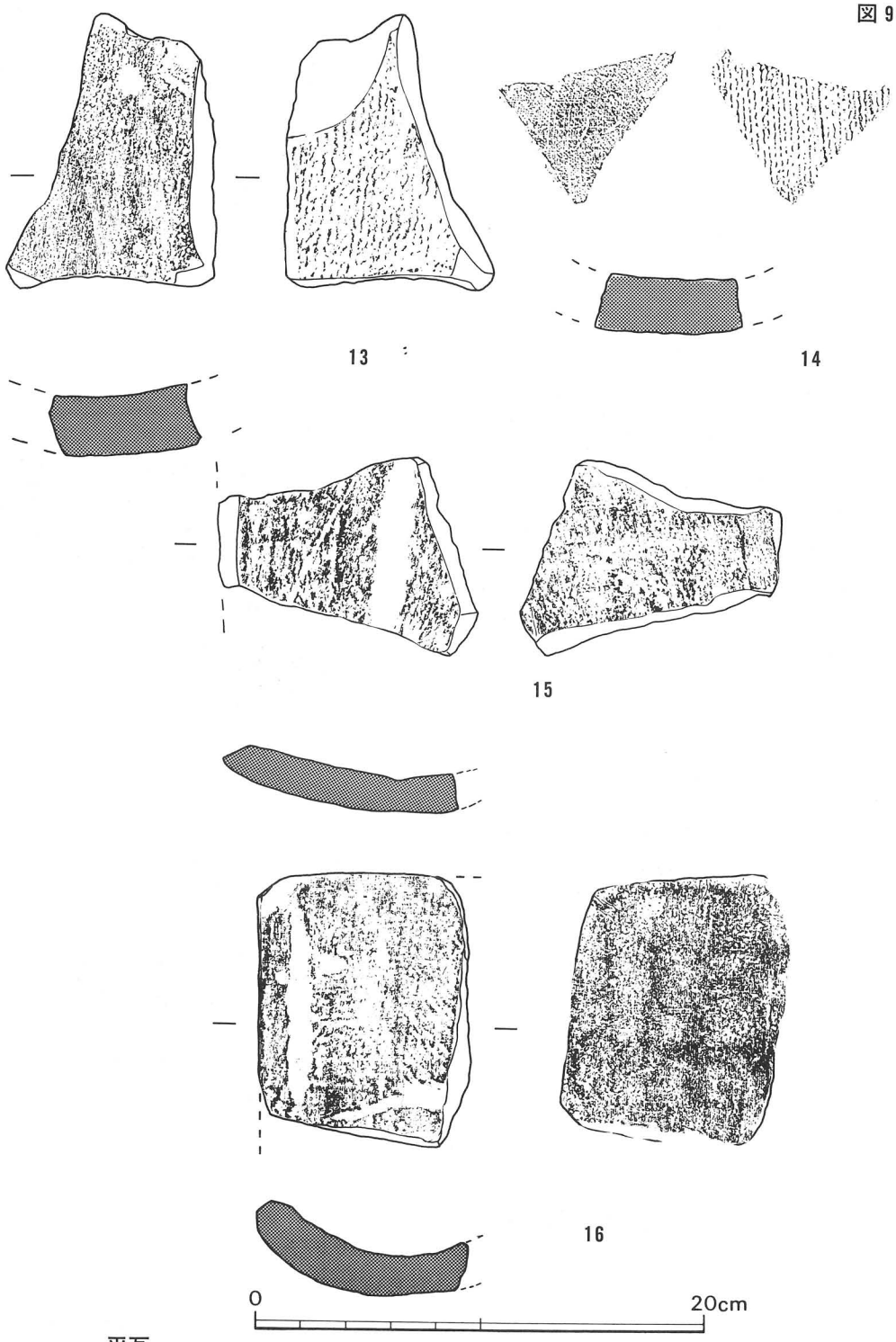
丸瓦・平瓦

図8



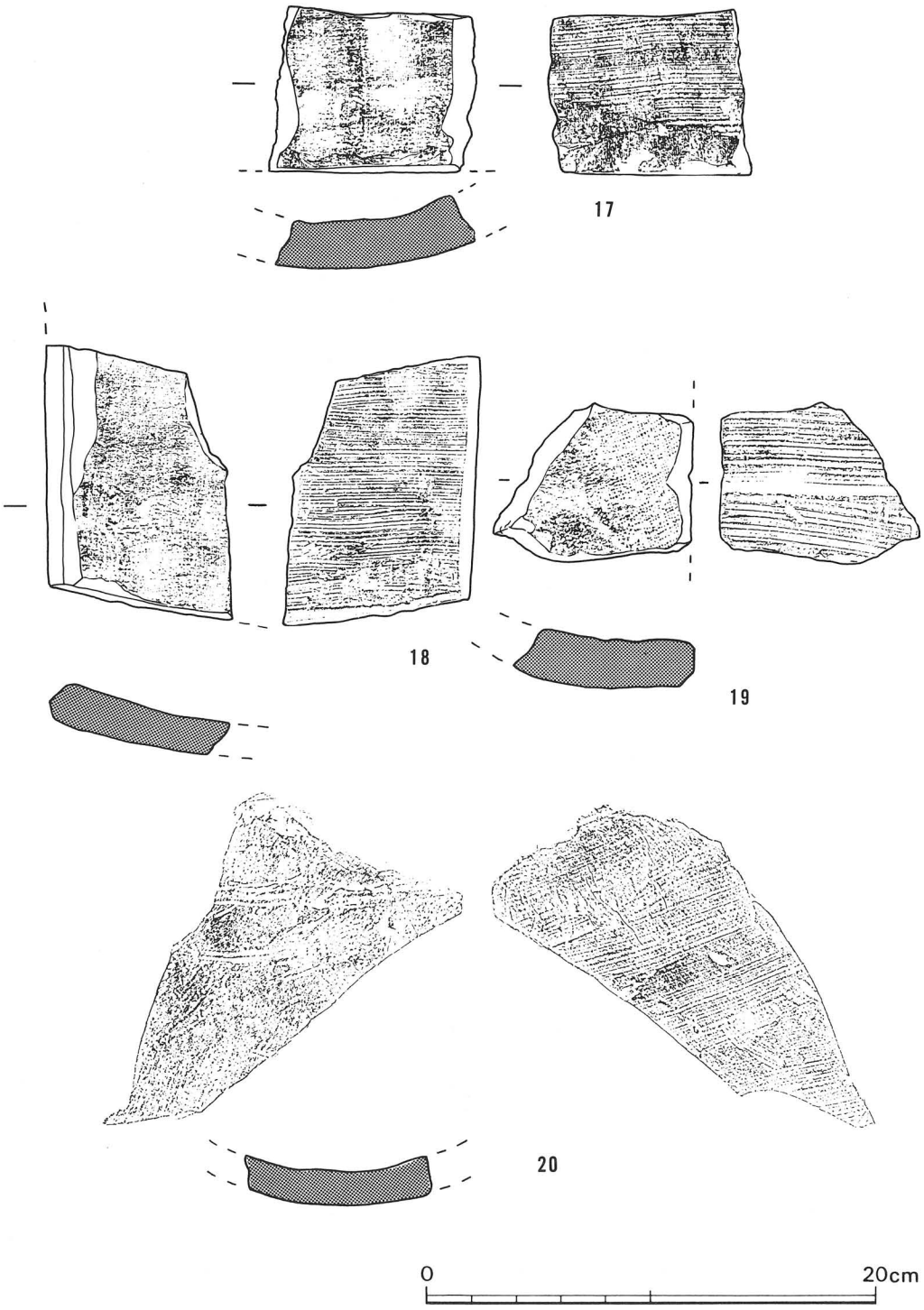
平瓦

図 9



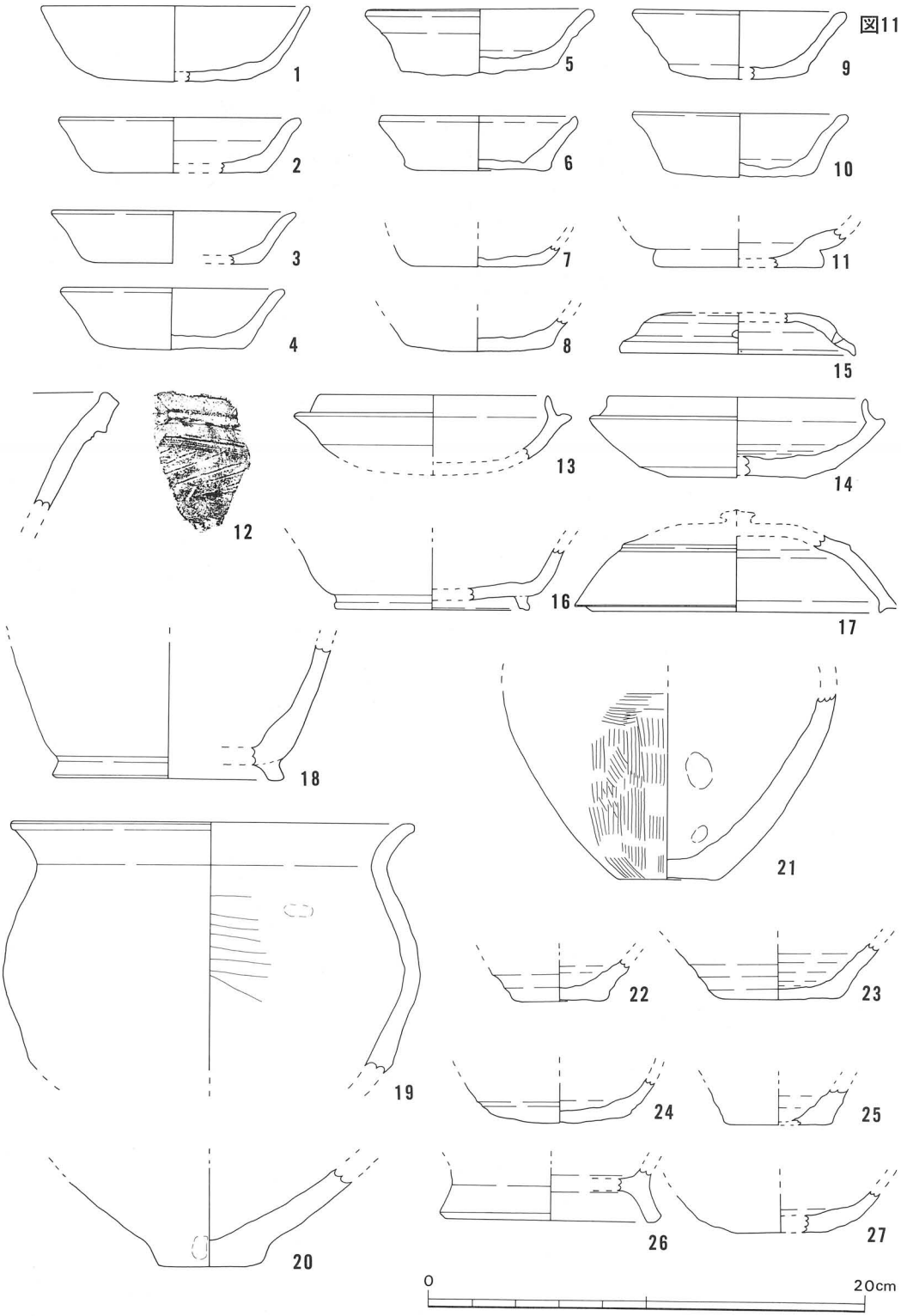
平瓦

図10

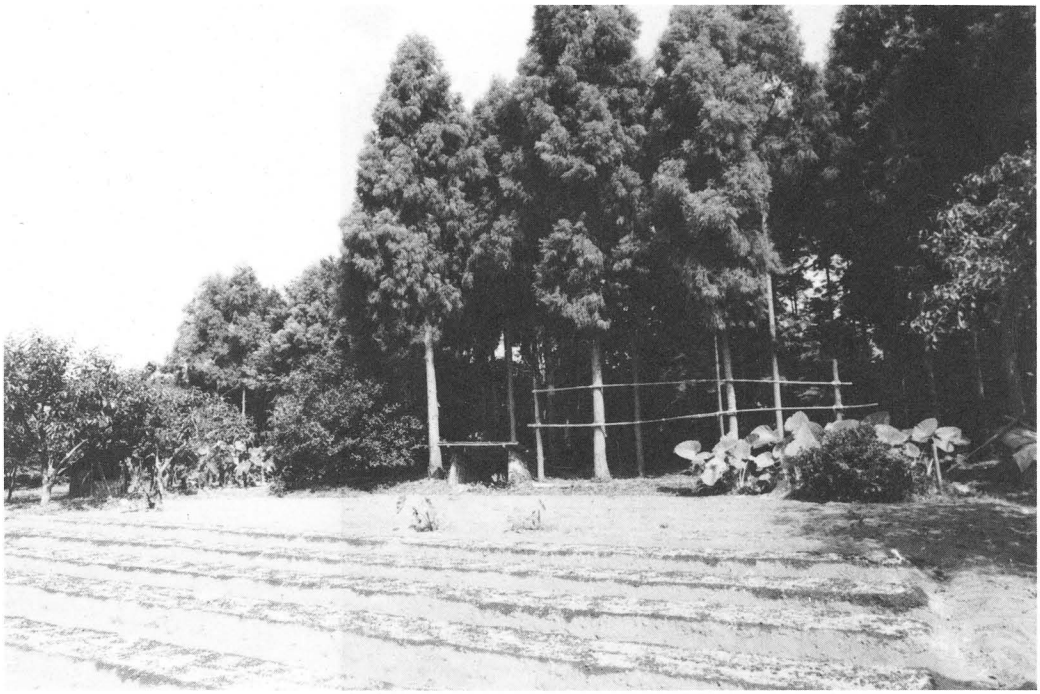


平瓦

図11

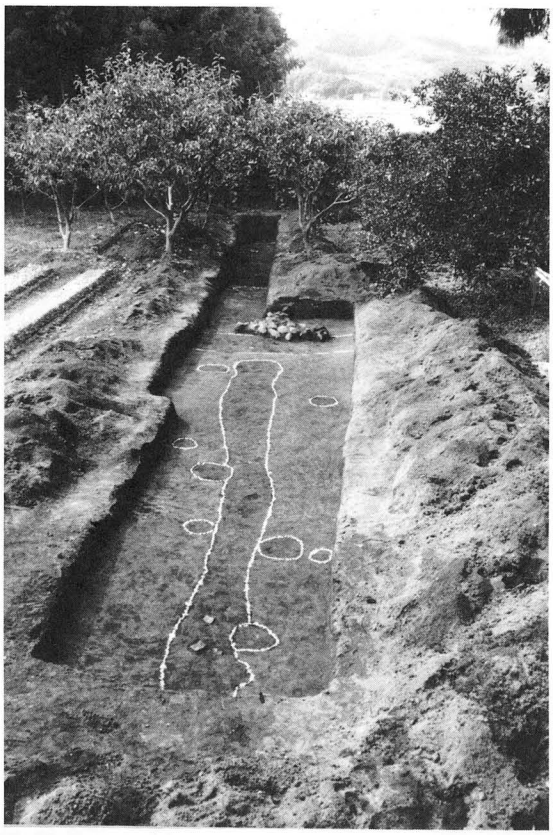


出土遺物実測図(須恵器(12～18),土師器(1～11・19・26・27),土師質土器(22～25),弥生土器(20・21)



第１調査区（金堂北側地区）近景（発掘前・南東から）

同上（調査風景・東から）



ＳＤ－１　検出状態（東から）

ＳＤ－１　完掘状態（東から）

井戸・溝跡（北西から）

同上（北から）

第２調査区（寺域東側地区）

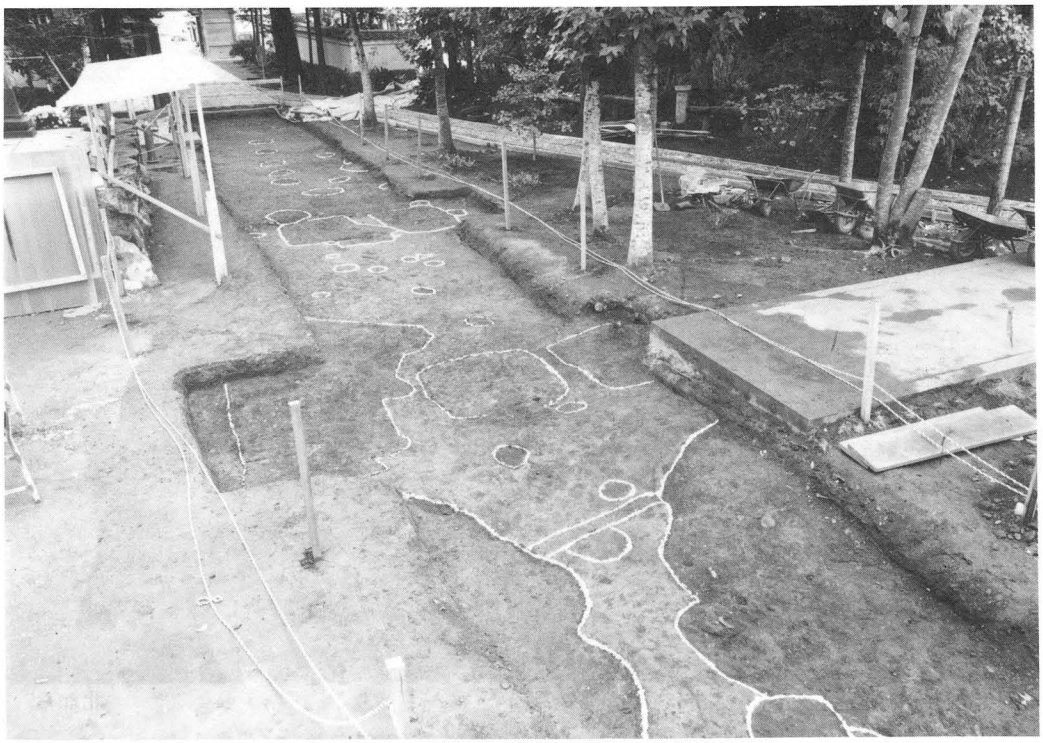
第 3 調査区(金堂北側地区)遠景及び近景(北西から)

上(南東から)

下(北東から)

第 3 調査区(金堂北側地区)遺構検出状態

第３調査区（金堂北側地区）ＳＤ－２～４（南から）



鐘楼西側，遺構検出状態（北東から）

第 4 調査区（鐘楼北側地区）発掘前（西から）

北から

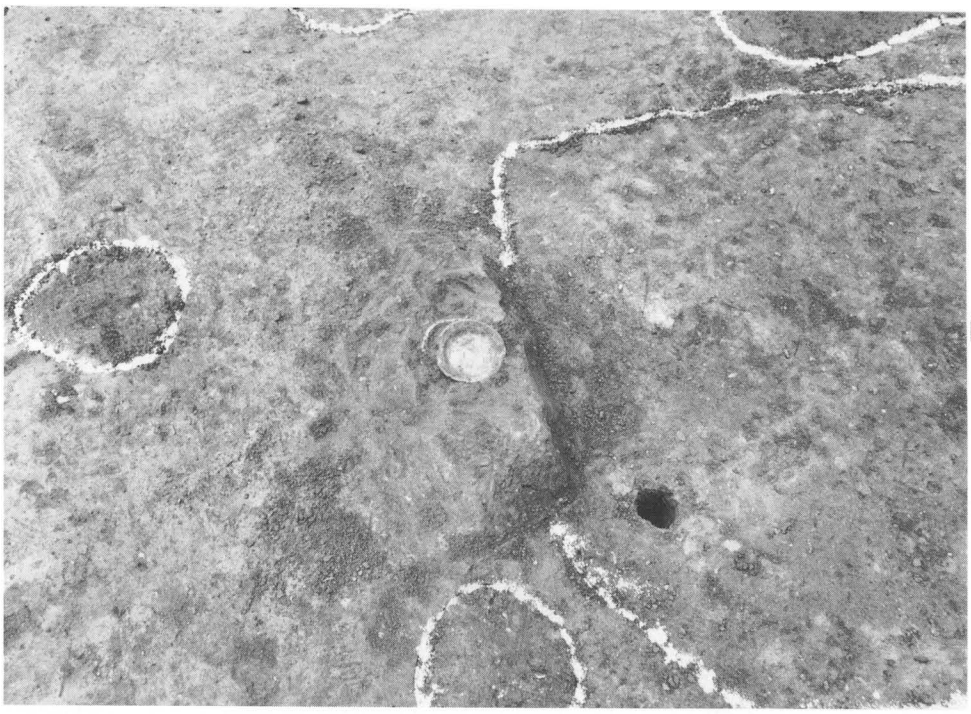
北東から

ＳＢ－１検出状態

南西から

南東から

ＳＢ－１完掘状態

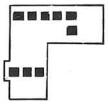


ＳＢ－１　覆土遺物出土状態（西から）

ＳＢ－１　北側ピット遺物出土状態（東から）

ＳＢ－１　掘方

1（東から）



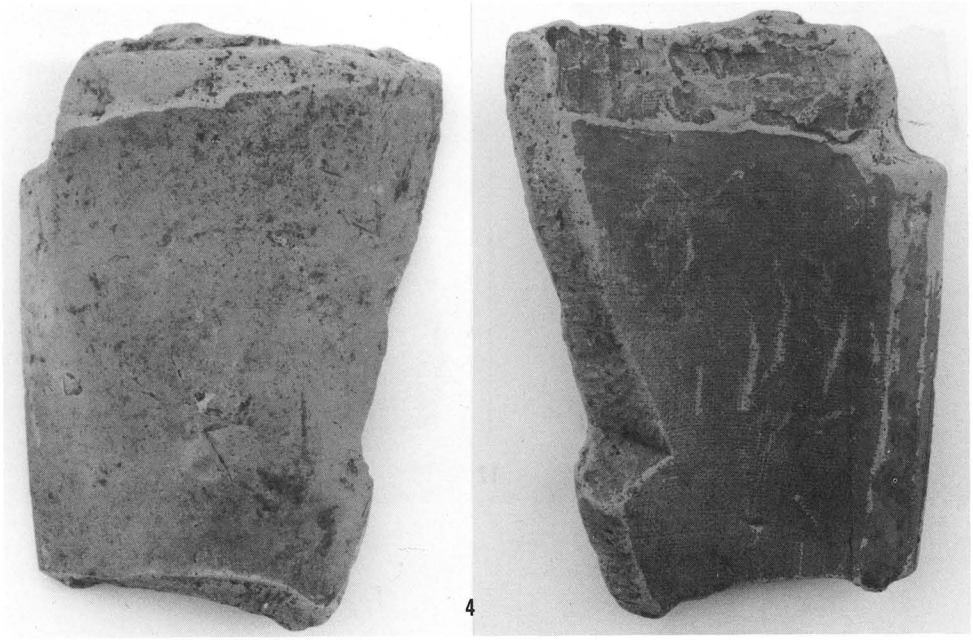
2（西から）

3（北から）

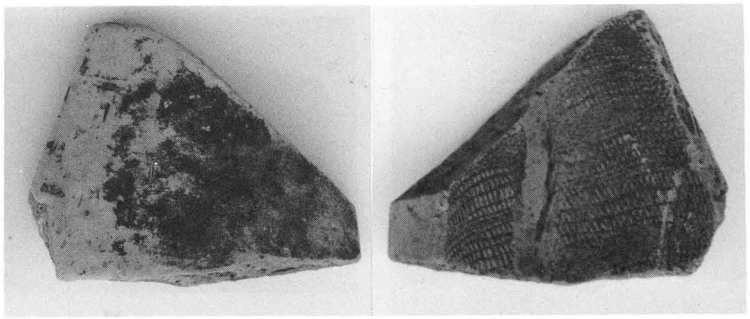
1

軒丸瓦

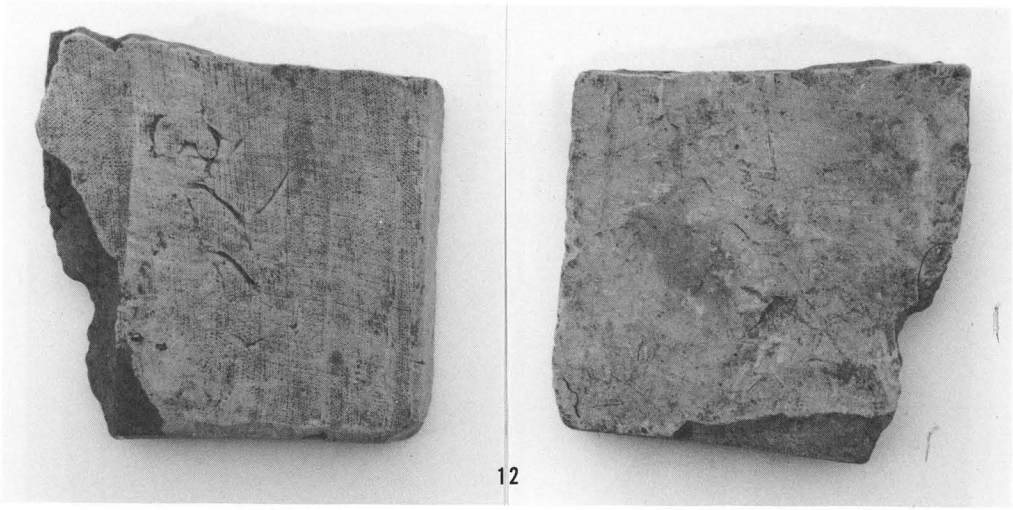
2



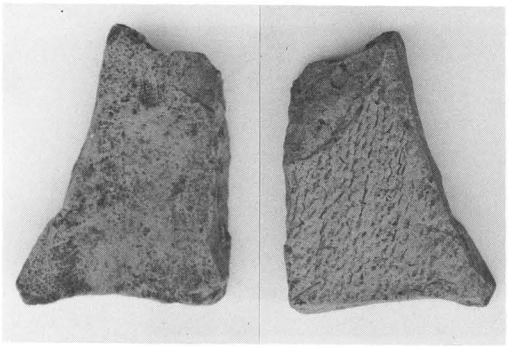
4

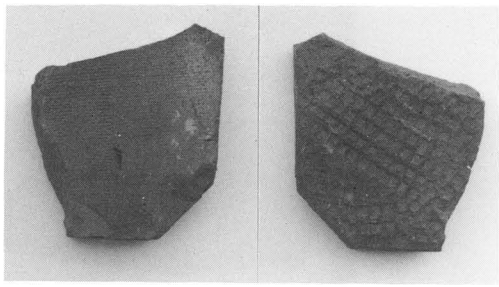


丸瓦・平瓦

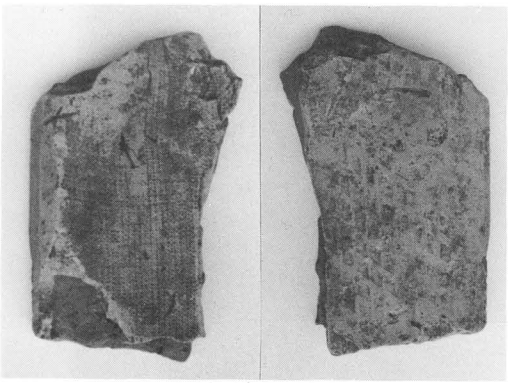


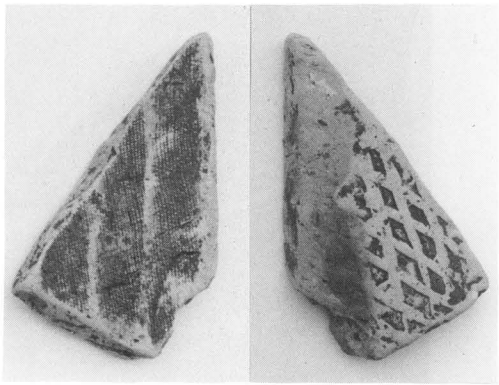
12





11

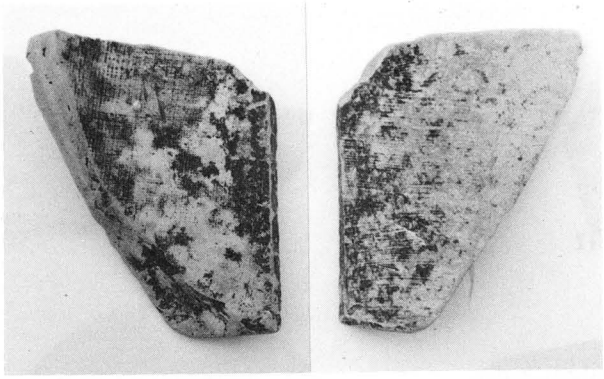


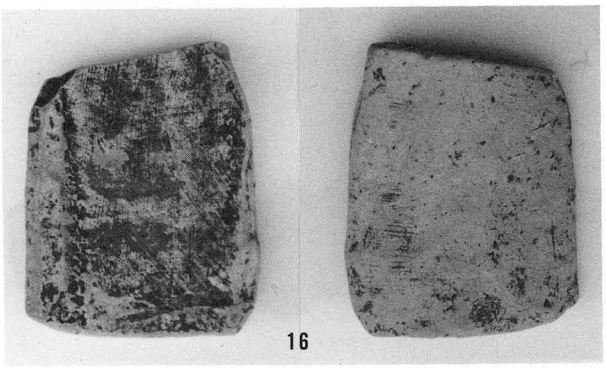


10

平瓦

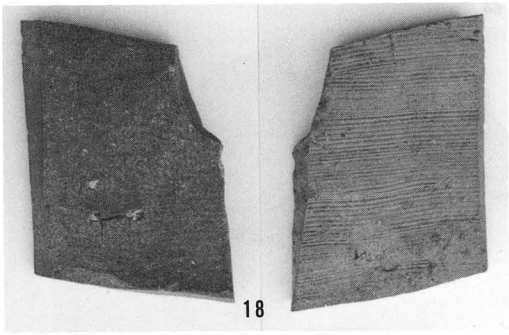
7



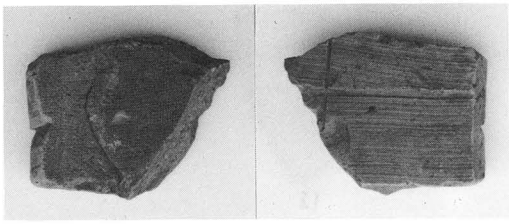


16

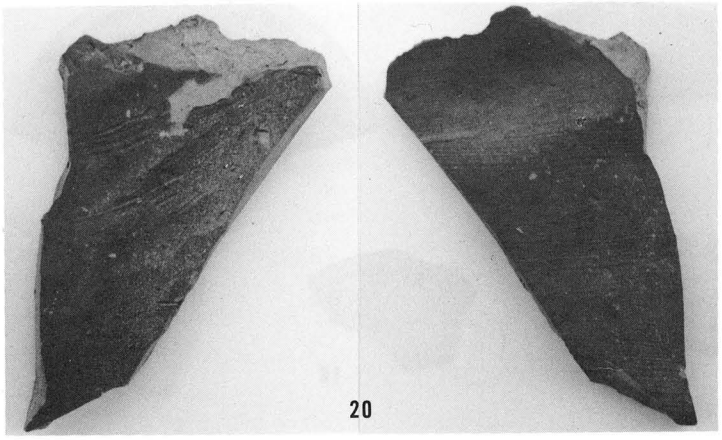
平瓦



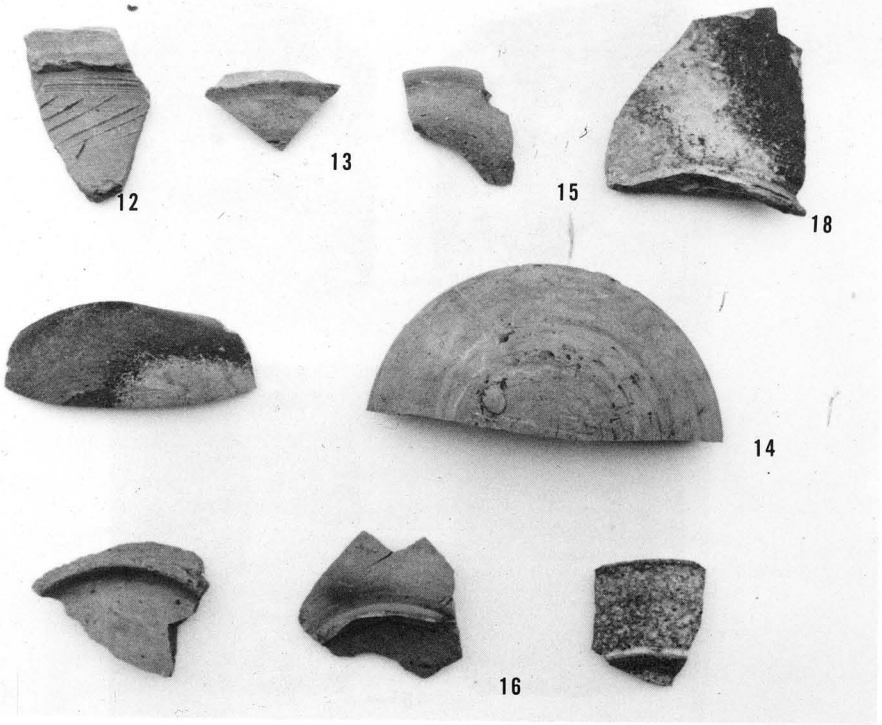
18



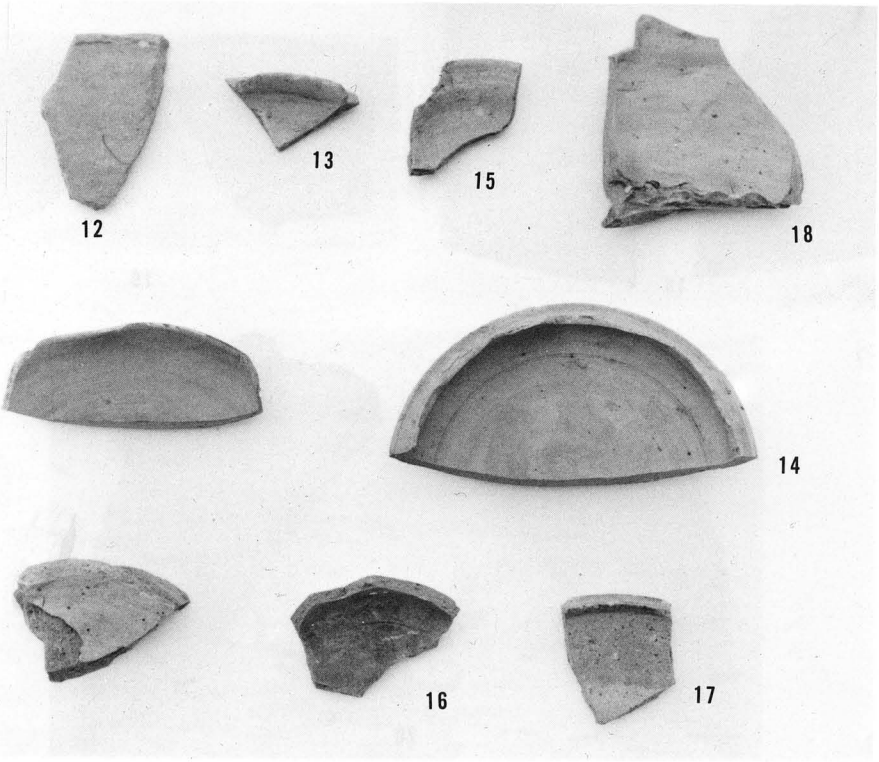
19

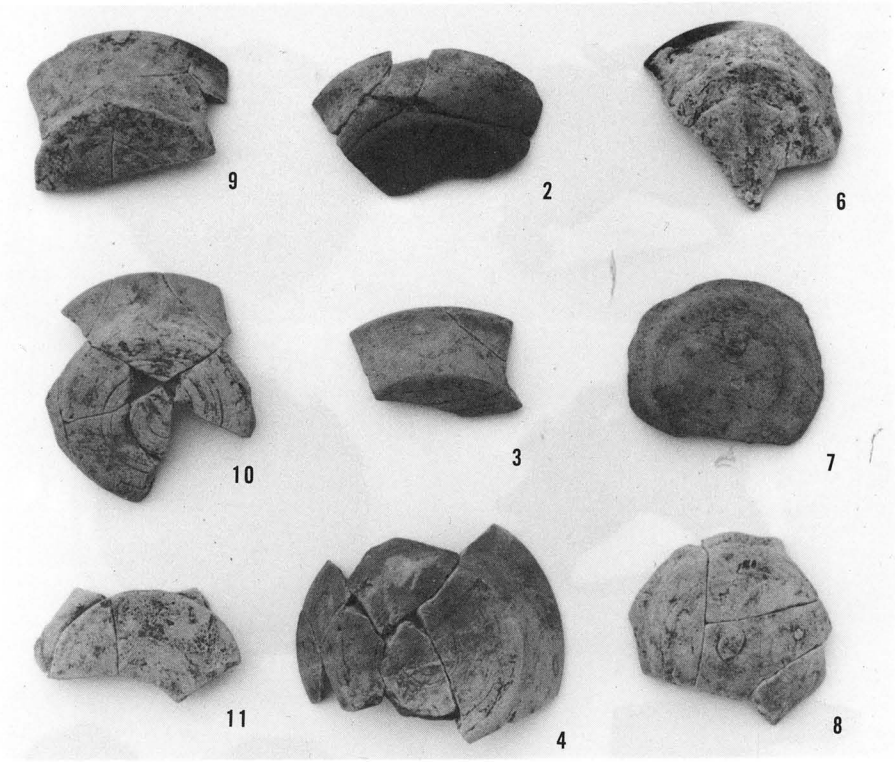


20

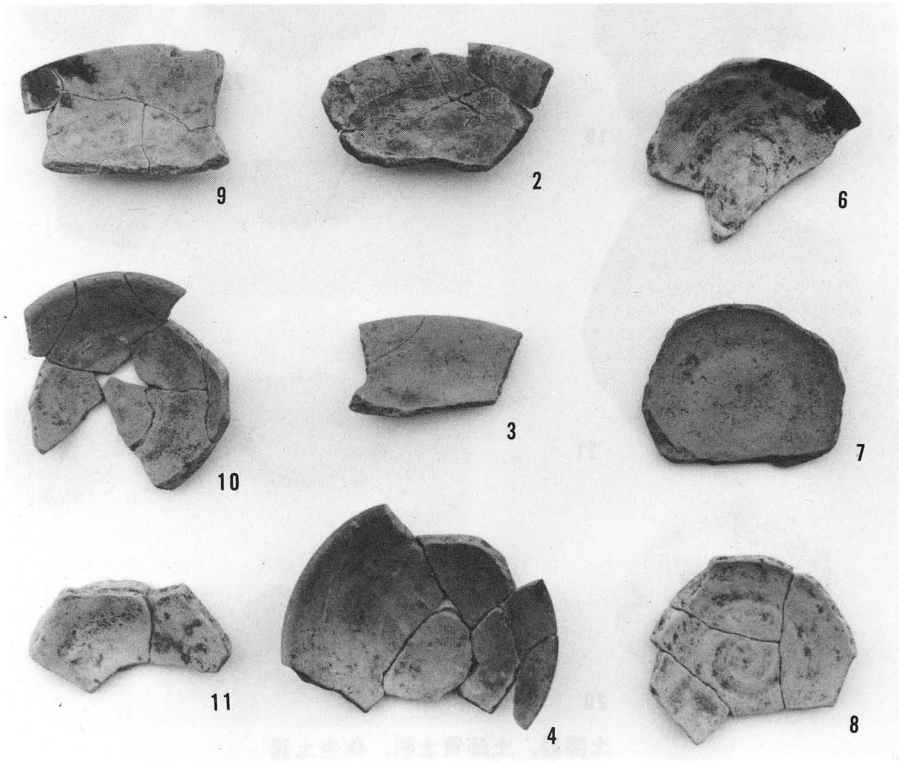


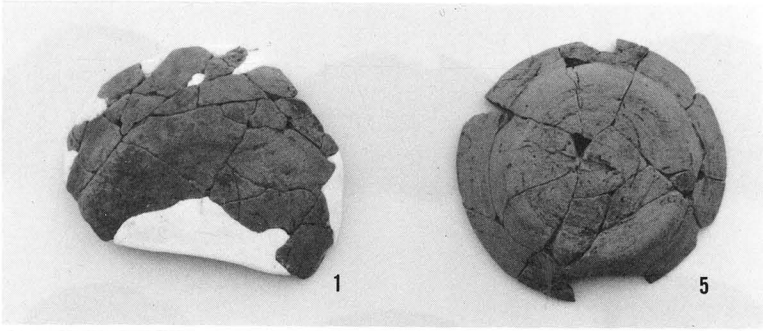
須恵器

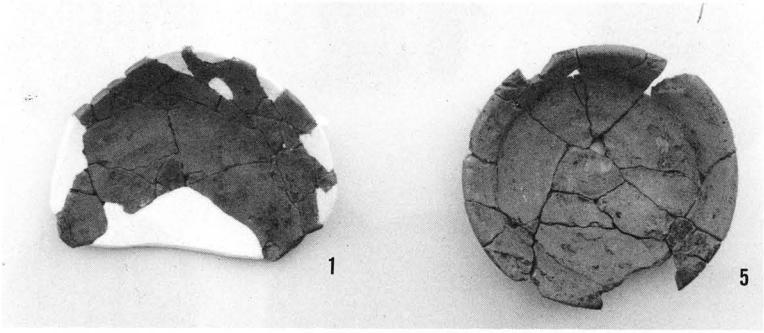


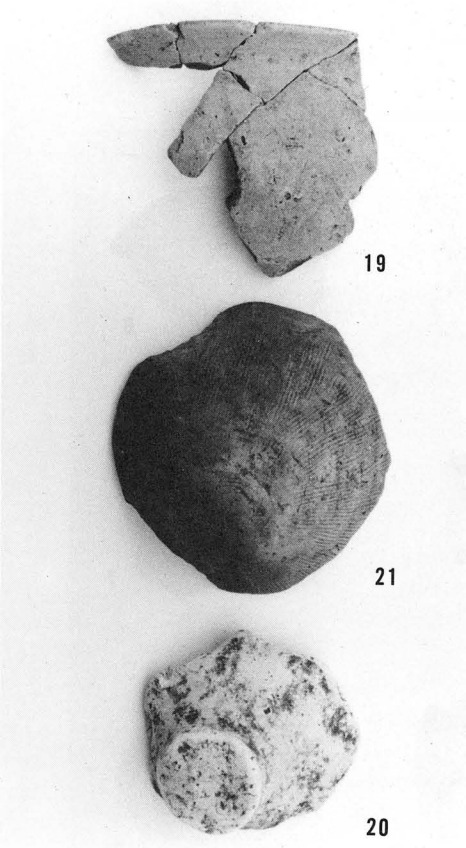


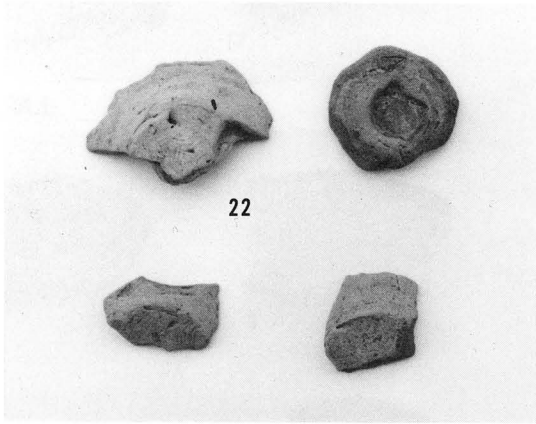
土師器











土師器，土師質土器，弥生土器

土 佐 国 分 寺 跡

―― 第１次調査概報 ――

昭和63年３月31日

編集・発行　南国市教育委員会

印　　刷　平 和 プ リ ン ト